ISSN1881-6029

マイクロカウンセリング研究

The Japanese Journal of Microcounseling

第４巻 第１号

2009年 3 月. Vol.4, No.1

特別寄稿

日本マイクロカウンセリング学会設立にあたって
―日本学術会議協力学術研究団体の承認を受けて―
……福原眞知子　1

原著論文

微笑みの有無とタイミングがカウンセラーの印象に及ぼす影響
……山口沙矢香・山本眞利子　14

会報

国際交流イベント報告……　23
会務報告……　25

日本マイクロカウンセリング学会
The Japanese Association of Microcounseling (JAMC)

編　集　規　定

1. 本誌は日本マイクロカウンセリング学会の機関誌であって，原則として１年１巻とし１号と２号にわけて発行される。
2. 本誌は，原則として本学会員のマイクロカウンセリングに関する論文を掲載する。
3. 本誌には，原則として原著論文，資料論文，事例報告，展望，特別論文，及び学会ニュース，会報などの欄を設ける。
   (1) 原著論文は，オリジナルな内容の研究論文とする。
   (2) 資料論文は，追試的内容あるいは試験的内容の研究論文とする。
   (3) 事例報告は，リサーチベースドの姿勢を保った事例発表の形式とする。
   (4) 展望は，内外の研究を広く収集整理し，総合的に概観した論文とする。
   (5) 特別論文は編集委員会で，主としてマイクロカウンセリングまたはその関連領域の専門家に依頼する特別寄稿論文とする。
   (6) 学会ニュースは，マイクロカウンセリング学に関する内外の情報及び，内外の関連学会の情報を掲載する。
   (7) 会報は，本学会の会務報告に関するものである。
4. ３の（1），(2)，(3) および（4）の論文は原則として投稿による。投稿された論文は査読を経て，編集委員会で掲載の可否が決定される。なお査読は編集委員以外の会員に依頼することがある。
5. 採択論文の掲載に要する費用は，原則として本学会で負担するが，図表等に関してはその費用の一部を執筆者に請求することがある。
6. 本誌に掲載した論文の執筆者に対して抜刷１０部を贈呈する。これを超える部数については執筆者の負担とする。
7. 本誌に掲載した論文の原稿は，原則として返却しない。
8. 本誌に掲載された論文を無断で複製及び転載することを禁ずる。
9. 本誌に掲載された論文の著作権は本学会に帰属する。

執　筆　規　定

1. 論文の内容は，未刊行のものに限る。
2. 論文の採否は，査読を経て編集委員会により決定される。
3. 論文の長さは，原著論文については原則として 8000～12000 字相当（図表を含む），資料論文，事例報告は 2000～4000 字相当とする。展望は 2000 字相当とする。特別論文は状況に応じて決定する。
4. 原著論文及び資料論文は原則として，問題（目的），方法，結果，考察，（結論），文献からなることが望ましい。
5. 原著論文，資料論文および事例報告には要約，キイワード（３語程度）および英文アブストラクトをつける。内容の長さは 100～150 語とし，英文については専門家の校閲を受けること。
6. 本文の記述は簡潔で明解にし，現代仮名遣い，常用漢字を使い，表，図は必要最小限にする。
7. 本文中の外国語（原文）の使用はできるだけさけ，外国語は外国人名，適切な訳語のない述語，書名やテスト名などに限る。
8. 数字は原則として算用数字を用いる。計量単位は国際単位を用いる。
9. 略語は一般的に用いられるものに限る。ただし，必要な場合は，初出の時にその旨を明記する。
10. 表と図は別紙に書き，通し番号を付し，表の題はその上部に，図と写真の題は下部に書く。これらは執筆者の責任で作成し，本文に挿入する場所を明記する。
11. 引用文献は，著者名のアルファベット順に一括して掲げる。その記述方法は日本心理学会発行の「執筆・投稿の手びき」(2000年版）を参照すること。
12. 脚注は通し番号をつけ，本文と同ページの下段に記し，本文中には，それに付する番号を付ける。
13. 論文は原則としてワープロ原稿で４部提出する。原稿の体裁はＡ４用紙に横書きで11ポイント文字，字数は１枚 1000 文字（40×25），余白上下左右とも 30mm とする。なお著者名・機関名・謝辞は別紙に記入すること。
14. 引用文献以外の詳細も原則として，日本心理学会発行の「執筆・投稿の手びき」を参照の上，執筆すること。
15. 投稿論文にはフロッピイを添えることがのぞましい。

※本執筆規定は平成18年３月より有効

付記：本執筆規定は，日本マイクロカウンセリング学会会則に細則として掲載予定である。

特別寄稿

日本マイクロカウンセリング学会設立にあたって
―日本学術会議協力学術研究団体の承認を受けて―

福原眞知子
日本マイクロカウンセリング学会　会長

日本マイクロカウンセリング学会は、平成19年12月24日付で日本学術会議により、協力学術研究団体に承認されました。本学会はマイクロカウンセリング研究会として20余年の実績がある母体ですが、これを機会にその責を自覚し、そのフィロソフィを貫きながら、さらなる発展をめざしてゆきたいと考えております。会計年度が毎年４月から翌年３月ですので、厳密には平成20年４月より協力学術研究団体としての本格的活動をおこなっております。

そもそもマイクロカウンセリングとは、米国のアレン・E・アイビイ博士とその共同研究者により開発されたものです。これはカウンセリングのメタモデル（基本モデル）としてカウンセリングや心理療法（心理カウンセリング）を学ぶ人々の学習には欠かせないものとなっております。アイビイ博士はこれを追求するなかで、発達心理療法（発達カウンセリング･療法）、多重文化カウンセリング（multicultural counseling）など、現代社会における人間の精神的援助に貢献するであろうコンセプトを拡大してゆきました。そのコンセプトは核として人間関係やコミュニケーションの根幹的なところを包括しておりますゆえに、適用範囲は広く、心理カウンセリングの分野においては勿論のこと、その他の分野・現場（教育現場、医療・福祉現場、企業現場、司法・矯正現場など）および一般の人々の生活の中においても活用可能なものと考えられております。その心理教育（psychoeducation）の形での活用にも多大の期待がよせられております。日本マイクロカウンセリング学会はマイクロカウンセリング研究会発足時よりアイビイ博士のアイディアとマイクロカウンセリングのコンセプトを認識し、これに忠実に、研究と啓発に務めてまいりました。今後この姿勢を守り、さらにはこれの日本文化の中での有用性を確認しながら、社会的・国際的にもより貢献しうる価値ある研究団体として発展させてゆきたいと考えております。このような思いのもと、このたびこれが日本学術会議より、協力学術研究団体と認定されました。これは大変喜ばしいことかと存じます。これも会員各位のご協力のたまものと、まずは御礼申上げます。学会設立（正確には学会化）の経過などにつきましては逐次ニュースレターや会誌などにおいて報じてまいりましたが、この機会にあらためて、その背景、経緯、経過と現状および近・未来的展望を述べさせていただきたいと思います。

序

著者とマイクロカウンセリングとの出会い

まずは少々私的な回想になりますことをしばらくご寛容ください。1962年に米国の大学院でカンウンセリング心理学課程を修了して帰国した筆者は留学中に米国の恩師Ｓ先生とひとつの約束をしていました。その約束とは「日本に帰国してカウンセリングを伝え、意義ある仕事をすること」でした。講義ではガイダンス（現在のキャリアカウンセリングの源流）に始まり、ロジャーズの人間性心理学にもとづくカウンセリングの理論と実践、現在の認知行動療法の源流となる行動療法などが講じられました。総じてその説くところは「人間援助におけるカウンセリングの果たす役割」であったようです。そ

の人間観やテクニックは様々でしたが、一貫して少なくとも個人にかかわる「個人尊重の精神」がそこにはあったように思われました。個人尊重とは一口でいえば簡単なようですが、それは何を意味するのか、そのためにはどうすればよいのかというようなことになると、なかなかむずかしいです。とくに自分と同様に他者をも認めるという関係が米国文化の中のカウンセリングにはありました。S 先生はそのようなことを理解する努力をしないと、私の米国でのディプロマ（卒業証書）が肩身の狭い思いをするでしょうとおっしゃいました。こうしてみると米国の先生との約束は単に米国で発祥したカウンセリングやテクニックをそのまま日本に伝えるということのみではないように思えてきました。即ち、このようなカウンセリングを伝え人々がそれに益するようになるためには、仕掛け人（？）である私はカウンセリングを学ぶことを通して“人間性やその文化”を理解する努力をしなければならないのではないか、先生はそれを私に伝えようとなさっているのではないか、と思いました。

約束を携えて帰国した私はまず右往左往しました。それは、そのような大それたことを試みる基盤を私は持ちませんでした。第一カウンセリングということばは当時日本では馴染みなく、これを伝えることのできる教育などの場は得られませんでした。意気込みはあってもこれは受け入れられませんでした。そこで一口に‘人間’、‘文化’といっても、それぞれの文化に「受け入れられる部分」と「受け入れられない部分」があるのではないかと考えました。だとすれば、これらをみていこうではないかと考えました。とにかくまずこの仮説を検証しようと思いつきました。そして‘人間に共通に受け入れられるカウンセリングの要素’を‘カウンセリングにおける“基本的姿勢”’と名づけました。受け入れられない部分については異文化的要因（狭・広義の文化）を考えなければならず、これこそ日本のカウンセリングを創造する材料を提供するものかもしれないとも考えました。苦悶しているうち、当時新しく始動したばかりの学生相談活動に参加させていただくことができましたので、その仕事を拠り所に相談と教育・研究活動に従事し、同時に前記仮説の実証的検証に意欲をもち続けました。（ちなみにその検証の一部は、それから20年後（1981）博士論文にまとめ、学会に批判を問うことになりました。これは今でいうデータ・ベースド（エビデンス・ベースド）・リサーチであろうかと思います。肥田野直先生（東京大学名誉教授・本学会顧問）にご指導いただきました。またその出版「来談行動の規定因―カウンセリング心理学的研究」（1986）においては勇気を出して‘カウンセリング心理学’ということばを披露させていただきました。おなじ語源（Counseling Psychology）をもちながら、「相談心理学」ということばはあっても、「カウンセリング心理学」ということばはまだ日本では使われていなかったかと思います。）

この間、またその後も、カウンセリング関係の文献は米国のそれに頼るしかありませんでした。その中でも特に、アメリカ心理学会（APA）から出版される Journal of Counseling Psychology、APGA（現在のアメリカカウンセリング学会：ACA）から出版される Personnel and Guidance Journal などを読み進める中、まもなくマイクロカウンセリングを創始することになるアイビイ，A. E. 博士の論文に出会いました。これはアイビイ博士がマイクロカウンセリングの代名詞のように掲げる三角形の構造図を世に出す以前でありましたが、今にして思えば、この構造図の根幹をなす、‘かかわり’となる姿勢について述べておられたようです。すなわちここではかかわりの姿勢とされるものは、‘相手とともにある’、‘よく聴く’ということが、具体的にはどういうことであるかといったようなことが書かれていたと思います。そして秘書嬢との対話を例に挙げ、具体的に‘人とかかわらない’ということがどういうことかということが述べられていました。そのシーンをイメージしてみると、たしかに、日本人である私にも容易に想

像できるし、それは実際日常的にも体験しています。たとえば、(相手の相槌にのって) 我が意を得たりと夢中になって話し続けたあと、むなしくなることがあります。信頼する相手にさえも自分を開示した後でむなしい気持ちにおそわれることもあります。そして落ち込む、相手を責める、などネガテイブな感情をいだいてしまいます。これは自分にとっても相手にとってもプラスにはならないでしょう。‘かかわる関係’は‘かかわりあう関係’、これは相互に形成され、一方的に、期待するものではないと考えられます。自ら適切な行動を起こし、相手をその行動に導くのでしょう。人間は思考、感情、求めるものも多様です。そのような相手と同調行動をとるということはどういうことなのか、それは一方的な相手への同化行動ではありません。‘心と心’で話すということ、それは相手を‘心で聴く’こととといえましょう。なにを？　相手をです。どのように？「まず聴く、そして聴いているということが相手につたわる（コミュニケートできる）ということ、そして伝わったことが、発信者にフィードバックされるようにすること」です。こうして‘聴く’ということが、目に見える形になるのです。聴いてもらっているということが体感できるのです。これには聴き方があります。カウンセリングを学ぶものはこのことを知らなければならない、そしてこれはもはやテクニックの問題を超えたものでしょう。この種のテクニックを科学的に検証し、かつプラクティカルに実用化するよう研鑽を積むのがカウンセリングを学ぶものの基本的かつ重要な心構えであろうかと思いました。

ここでふたたび筆者は、先のＳ先生との約束事を思い出しました。そういえば先生は‘カウンセリングはサイエンスかアートか’と常に問いかける姿勢を学生たちに示しておられたようでした。カウンセリング関係においては、人間が共通に求めているものがあることを、同時にそれを個々に異なる人々に提供するのであることを、知らなければなりません。これこそサイエンスとアートのコラボレーションです。また、共通する部分に対応する姿勢、これこそは‘基本的姿勢’とよぶものであろうと私は考えました。ここで私の造語、‘カウンセリングにおける基本的姿勢’とアイビイ博士のいう‘かかわり’がドッキングすることになりました。すくなくとも私の中では。そこでどうしてもアイビイ博士と出会いたいという衝動に駆られ、いきなり国際電話で面会をもとめました（当時はメールはありませんでした)。それぞれの予定が入り、これが果たされたのはその数年後の1976年でした。

1976年の夏、筆者はマサチューセッツの博士のご自宅に快く迎え入れられました。私は上記の思いを素直にぶつけました。博士は筆者がご自分の研究に関心をもってはるばる日本からやってきたことに謝辞を述べられ、初版の“Microcounseling”（1972）をくださいました。そしてご自分の開発を日本に紹介することの可能性を打診されました。筆者はまず自分は日本ではまだまだ地位や力もなく、そのようなだいそれたことは個人の力では無理であると答えました。しかし同時に、そのための努力は惜しまないと約束しました。それは、博士の持論が日本の人々に、より理解されるよう、翻訳などを通して紹介することでした。さらにそのためにもと、前記した‘カウンセリングにおける基本的姿勢’の検証のため筆者がこころみていた交差研究（cross-cultural study）に協力いただくことを願い出ました。私は単に新しいものを紹介、導入するだけではなく―それは当然のことではありますが―同時に先述の‘カウンセリングにおける基本的姿勢’を検証しながら、日本のカウンセリングの分野での有効性を検証・実行したいとの野望をお伝えしました。必然的にこれは、‘人間’や‘文化’の理解を深めるものであろうとの思いを一層強めました。アイビイ博士の提唱するマイクロカウンセリングはまさにこのような目的にかなうものでありました。ここで私は恩師Ｓ先生との持ち越しの約束（カウンセリングにおける基本的姿勢の検証という不毛的課題に挑戦し続けること）に加えて、ア

イビイ博士との約束（日本にマイクロカウンセリングを導入すること）を果たすという、二つの大きな約束をかかえることになりました。しかしこれらは決して分離したものではないとの確信のようなものも持ちました。

アイビイ博士との約束を果たす好機は到来しました。1984年の秋です。これは虎の衣を借りてのものではありましたが。筆者が所属していた日本学生相談研究会（現日本学生相談学会）がアイビイ博士の招聘を決め、当時当該学会国際交流委員長であり、博士と面識のあった筆者がその任にあたることになりました。なにぶん急な招聘でありましたが、初対面以来の交流もあり、ことはスムーズに運び、アイビイ夫妻の来日となりました。一方筆者とアイビイ博士との約束の一環である翻訳等の印刷は完成されてはおりませんでしたが、着手されていました。また筆者はアイビイ夫妻らによるテープ「マイクロカウンセリング　丸善出版　全４巻」の翻訳・監修も手がけていました。なにはともあれ、招聘が実現したことは公私ともに喜ばしいことでした。ここではマイクロカウンセリングの「三角形」が紹介され、参加者の関心をそそりました。

アイビイご夫妻の滞在中、筆者はそのホスト役に椙山喜代子、国分久子、楡木満生の諸先生の協力を得ました。アイビイ博士帰国後、この方々をお誘いし、直後に翻訳作業は完成し、川島書店から出版されました(1985年)。当該書の出版に際してはこれがマイクロカウンセリング紹介本の最初となるため翻訳語のコンセプトが原著とずれのないよう、特に慎重に、神経を使い、電話やファックスでアイビイ先生とのディスカッションを重ねました。この作業は当初の筆者の狙い通り、大変勉強になりました。

日本マイクロカウンセリング研究会の誕生

アイビイ博士の招聘と出版での学習をフォローするべく筆者が代表となり1985年に日本マイクロカウンセリング研究会を発足させました。これが現在の日本マイクロカウンセリング学会の前身である日本マイクロカウンセリング研究会です。会員を募り、ここで‘新しいカウンセリング’について共通認識をもつべく（共通言語をもつべく）随時に研究会を主催しました。次段階としてこれをより多くのかたがたに分かち合い私たち自身も研鑽を積むべく、諸種の現場に啓発・研修にでかけることを計画していました。 先の先生がたに加え冨安玲子、玉瀬耕治（いずれも現学会理事）の両先生もこの研究会に加わってくださいました。肥田野直先生に顧問をお願いしました。

途中諸般の事情で研究会活動が中断したかに思われた時期がありましたが、その間筆者はアイビイ博士の要望にこたえて、主としてテープの翻訳・監修・出版を精力的におこないました。またこの間これらを通して日本にマイクロカウンセリングが啓発されていったようです。一方共通言語を確認・消化しながらの啓発という点で、果たしてそれがオーソドックスな道を辿っているかどうかについての杞憂は禁じ得ませんでした。マイクロカウンセリングが日本全国で一人歩きしているかもしれないと。それでなくても、これがいわゆる実学の性格をもっていることを考えるとき、そして対象が多様であることを思うとき、それは懸念されます。いずれの人々にとっても、基礎について習得すべき重要なものがあります。カオス的なものとなってしまうと、将来源流をたどることができなくなるかもしれない。これはマイクロカウンセリングに限らず、この分野（実学）の発展どころか悲劇であります。なんとかこれはまもらなければならないと考えました。そこで各界識者のかたがたとご相談し、無謀な拡散を防ぐには、商標を取得して知的財産保護の形をとるしか方法がないことがわかりました。誤解を招くかもしれないことを認識して消極的ながら、それを実行しました。研究会では、誰もがマイクロカウンセリングを正当な方法で学ぶ努力をし、実践し、これを広く伝えることが本命であり、この努力を怠ってはならないとの自覚をあらたにしました。仁科弥生先生（現学会理事）、稲垣貢先生

（現学会広報委員長）、藤光純一郎先生（研究会元理事）、黒澤祐一先生（研究会元理事）などのご参加がありました。事務局長は杉秀明氏（川島書店編集部）が会員として引き受けてくださいました（但し2000年まで）。

1994年、二度目のアイビイ夫妻招聘がかないました。招聘の目的はマイクロカウンセリングの本流（原点）を確認することでした。日本マイクロカウンセリング研究会は二日にわたりアルカディア市谷私学会館において研修会を主催しました。ここではマイクロカウンセリングの技法が再度紹介されました。さらに、発達心理療法（DT、現在のDCT）がはじめて披露されました。先にアイビイはDevelopmental Therapyと題した著書にこれを紹介しておられました（1986）。ここでは彼はピアジェ，J.、プラトーやエリクソンの概念を比喩的に用いて、個人の発達を４つの段階に分けました。これは感覚運動的・前概念的思考、具体的思考、抽象的思考、体系的・弁証的思考のそれぞれの段階です。これを現象的な横の発達とし、どの年齢段階（縦の発達段階）においてもこれら横の発達段階がみられるとしています。たとえば45歳の男性（縦の発達段階的では成人期にある）が思いもよらずリストラを告げられ危機的状況におかれるとします。彼は戸惑い、為すすべを知らない（感覚運動的）。しかし翌週辞表の提出を余儀なくされ、これが現実であると思わされます（具体的）。しかしまだどうして自分が…どうして…と現実を受け入れられない。悲嘆、怒り、葛藤の末、現実を受け入れ、それに対処することを考えます（抽象的）。そして現実に即した、より客観的な対処を模索するようになる（弁証法的）。これが、アイビイのいう、発達のプロセスなのです。発達は人間の「実現」への変化、変換、成長なのです。このような発想はアイビイがケルトの血統にこだわりながら、米国という多民族国家の中で育ち、「カウンセリング学」に出会って、人々の同質性や異質性に目覚めたプロセスの上で生まれたものではないかと思われます。さらにアイビイによると、日本人である筆者との出会いにも刺激を受けたということです（1986）。多文化、多重文化を意識した発達の考え方は発達心理療法として、今や諸種のトラウマへの対処／治療に有効であることが証明されています。このような発達心理療法に関する講義は、日本の同学の人々に刺激を与えました。第一回招聘後、アイビイ先生のもとに行かれた玉瀬先生も独自の研究方法（内省的考察法）を加えてこの種の研究を続けておられるようです。

当該研修会のあと夫妻は私どもの案内で箱根、鎌倉、京都、奈良と、はじめて日本での旅行を体験されました。この招聘には富沢会員（丸善出版部）とそのスタッフに大変お世話になりました。

（一寸付け加えておきますと、先にアイビイ博士の強い要請にこたえて、筆者は博士の著書DT（Developmental Therapy、1986）を翻訳しました。翻訳は難解なものであり、中断の時期を含めて、歳月を要しましが、語学に堪能な仁科先生のご協力を得て完成し、「発達心理療法」と題して丸善より出版されました（1990）。）その間アイビイ先生はDCT（Developmental Counseling and Therapy）と題しテープを出版し、その翻訳を筆者に要請してこられました。ここでは、セクシュアルハラスメントへの対処や、当時米国で社会問題にもなっていた（現在もですが）ベトナム帰還兵のトラウマへの治療に、アイビイ先生自身がマイクロカウンセリングを用いた対応をおこなって成功した事例の説明などが満載され、大変今日的な、貴重なものでした。納得して筆者はこれを翻訳・監修し、やはり「発達心理療法」と題して出版しました。ここでコンテンツに忠実にという筆者のフィロソフィを貫きながら一寸悩んだことがありました。それは先の著書（DT）にもテープ（DCT）にも発達心理療法と題したことです。著書DTでオリジナルはTherapy（T）でありましたが、これは邦訳ではセラピイ・治療となるでしょう。一方当該書の内容はいわゆる‘治療’ではなく心理学レベルでは心理療法（psychotherapy）である、またそうよぶのが適切と認識しました。

そこでこのpsychotherapyの概念をどう扱うかということでまた迷いました。私なりには、ここではcounselingをふくめたものであると考え、その邦訳のニュアンスをアイビイに伝えて了承を得、最終的に、「発達療法」ではなく、「発達心理療法」としました。後にDCTは「発達カウンセリング・療法」あるいは「発達カウンセリング療法」ともよばれていますが、コンテンツ的には先の「発達心理療法」と同じとみなしていただいてよいかと考えます。)

とにかくアイビイ博士のアイディアはあくことを知らず、研究会も、筆者個人としても、それを受け止めるのに手間取っていました。とはいえ1994年の第二回招聘以降マイクロカウンセリング研究会は再編され、それなりに成果をあげておりました（導入後期を迎え、発展期にさしかかっておりました)。そして1997年、三度目のアイビイ夫妻招聘が可能になりました。テーマは「マイクロカウンセリングの展開―さらなる理解と実行に向けて―」でありましたが、この招聘が事実上、日本マイクロカウンセリング研究会活動の再スタートとなりました。それ以降総会を含む年次の研究会および研修会もトータルで年４度開催されそれらを報じた小冊子(学会誌に相当するもの)および年２度のニュースレターも定期的に刊行されるようになりました（福原編・監修　2007　マイクロカウンセリングの歩みと展望　川島書店　参照)。

四度目(2001)の招聘は２日にわたり、一日目は東京で、二日目は京都で開催されました。東京では「マイクロカウンセリンググループアプローチ」と「発達カウンセリング療法」が講じられました。このとき、博士は“Microcounseling group approach”（2001）を執筆中でした。ここではまた、多重文化的アプローチの重要性が指摘されました。ナラテイブアプローチの展開方法などもここで披露されました。京都ではあらためてマイクロカウンセリング技法をまとめたあと、先に（1994年）に紹介された発達心理療法をさらに深めた内容が紹介されました。たとえば人格障害についても発達心理療法的アプローチの視点ではこれは、個人の発達線上にある、ユニークネスととらえられ、医学的理解と治療は状況に応じて必要ではあるものの、発達心理療法においては、あたまから症状としてとらえるのではないこと、その状態に理解を示しながらも、あくまで‘かかわりの姿勢’を示すことが必須であること、これがその状態の改善の支えになることなど、サイコセラピイ（カウンセリング／心理療法）におけるアイビイ先生の姿勢があらためて明確化されました。 人格障害の諸問題も、‘人間’を理解する上で、教育的、社会的などの角度から追求されるべく、ますます重要な今日的課題となっています。この招聘でアイビイ先生のマイクロカウンセリングの背景にある人間観（self-actualizing individual, self-in-relation, self-in-family, self-in-community, multicultural individual）およびそれへの発達的、心理教育的アプローチが一層明確になりました。このように展開するアイビイの人間観は、さらなる人間理解の諸論を展開する上で彼個人においてもまた、当該分野・関連分野においても有意義なものになったといえましょう。実際、博士の人間への多重文化的アプローチの考えかたは盟友Pedersen, P.博士らと共同で、multicultural counseling approachとして認識され、カウンセリング界の第四勢力と受け止められるようになりました。この頃日本マイクロカウンセリング研究会もまさに啓発期にありました。

そろそろ日本のマイクロカウンセリングも、ことばどおり、創造期に入らなければならなかったのですが、原点理解が不十分なまま、啓発活動が先行しているという印象が強く、日本のマイクロカウンセリングの発展を託された筆者としては忸怩たるものがつきまとっていました。啓発がすすむことは嬉しいことではありますが、一方、約束事が守れないまま、理解より行動(実践）が先んじ、原点が不安定になるということにです。アイビイ博士もこの点を憂慮しマイクロカウンセリングの正しい理解のために惜しみない援助を差し伸べてくださいました。マイク

ロカウンセリング研究会は、アイビイ夫妻が主催するMicrotraining Associatesと連携関係を結び、夫妻はわたしどもの研究会の顧問に、筆者はアソシエイツの顧問にという形においても、アイディアの交換や出版物の交換をおこなう約束をしました。一方、こちらの出版物は主として邦文で書かれており、翻訳を必要とします。さしずめ筆者がニュースレターの要旨を翻訳し、他はメールなどで、情報を共有し意見を交換するなどの方法をとってきましたが、これは今後はインターネットを駆使し、より積極的に進めなければならない活動のひとつです。アソシエイツにおいてもそれが期待されているようです。

そうこうしているうち、マイクロカウンセリングの理解に熱心であった日本健康心理学会（野口京子先生：当時当該学会国際委員長）がアイビイ博士の招聘に関心をもたれ、筆者がそのliaisonの役割を託されました。結果2004年にアイビイ夫妻は５度目の来日を果たされました。事実上この招聘にはわたしども日本マイクロカウンセリング研究会も深くかかわらせていただき、その招聘期間中にアイビイ夫妻を囲んで独自の研修会を催すことができました。ここではアイビイ博士とその共同研究者であるマイヤー博士らの開発になる、ウエルネスモデルが紹介されました。講演テーマは「Wellness over the Life Span」でした。これはまた画期的なものであり人間のとらえかたとして、多次元的アプローチをこころみたものです。これは決して偶発的に発生したモンスターではなく、博士らの積年のマイクロカウンセリング研究とその発展から生じたものであると思います。ウエルネスモデルによると、マイクロカウンセリングや発達心理療法の対象となる個人やグループはマルティカルチャーの中に存在し、それには多くのファクター（大別して５つのファクター）がかかわっている（関与している）こと、そして個人の「実現」にはそれらファクターの状態を指標とし、それぞれにおける‘強み’をはげまして心身の健康（ウエルネス）が保たれるということであるといえましょう。マイクロカウンセリングの活用や発達心理療法においても、これらを認識して用い、人々の「実現」に寄与するということになります。この根底には人間の‘ポジティブネス’を信じるということがあります。このポジティブネスということばは、心理学領域に限らず、医学領域でも古くから取り上げられていたようですが、アイビイ博士は早くからこれを‘肯定的資質’としてとらえ、その発掘をマイクロカウンセリング技法の使用時に期待しております。このポジテイブネスは問題解決の動機付けファクターとして精神神経医学や心理学の分野で治療・矯正に効果があるといわれてきました。アイビイ博士はこれを心理教育にもとりいれておられます。さらにアイビイ博士の探求は飽くことを知らず、近年はこれらについて脳科学の知見からの実証をこころみておられるようです。

公認学会への思索

この間、筆者は当該マイクロカウンセリング研究会の認知度をより高め、学問的にも社会的にもより貢献できるものにしたいと考えていました。そのためには研究会として研究・実践の努力を重ねることはいうまでもありませんでしたが、社会的にもより公認されることも必要であろうと考えていました。私的レベルであるにしても、他の関連学会のように学会とよばれるには研究面や人材の面で、ハードルが高い、そこで目的の具体化のためによい方法はないかと、1995年ごろから２、３度文部省（現在の文部科学省）をたずねました。 そこでは法人化についての話も出てきました。それによると法人には財団法人と社団法人があること、所轄団体としては、国レベルのものと、地域レベルのものがあること、などがわかりました。さしずめマイクロカウンセリング研究会は国レベル（文部省）の管轄下にあるのがのぞましいと思われましたが、いずれの法人にしても費用がかかりすぎます。それに社団法人というのは人の集まりであり、財団法人は企業的要素があります。（のちに当時の、制度による公益法人の話も持ちこま

れました。これは現在新制度のもと政府で検討されているものではありません。）これらの情報はいずれも当時の私たちの研究会にはフィットしないように思われました。やはり私的レベルでも、学会として、研鑽を積むよりしかたがないのかと悩みました。オーソドックスなマイクロカウンセリングを社会的にも認知され且つこれをもって社会的にも貢献したいという思いが募りましたが、一方すぐに学会化するということには二の足をふまざるを得ませんでした。

そうこうするうち、会員のお一人から近年の傾向として NPO（非営利法人）という法人がある、研究会を NPO 法人化してはどうかとの提案がありました。耳慣れないことばでしたが、筆者はさっそくその行政上の管轄府である都庁に出向きました（あとでわかりましたが、これは国レベルでも管轄していました）。担当官の説明を聞くうち、NPO 法人では社会的公認のもと、マイクロカウンセリングの実践を広げ、これを一般のひとびとに提供することができるのではないかと思いました。一方では現行のマイクロカウンセリング研究会を NPO 法人化してしまうのか、という問題につきあたりました。しかしこの悩みはすぐに解消されました。なぜなら、これまで培ってきたマイクロカウンセリング研究会での成果をこの種の NPO 活動に結びつけることができれば、こんなに強いものはないのではないかと考えたからです。カウンセリングや心理学では‘役立つもの’（研究と実践の統合）を模索することがもとめられますが、果たしてその統合が実際に役立つものかどうかについてのフィードバックには不安がつきまといます。あくまでもその努力はラボの中での検証に終わるかもしれません。決断はつきました。マイクロカウンセリング研究での果実をコア（核）として人々に貢献することを模索する NPO 法人を立ち上げようと。 都庁では当時そのような NPO 法人は珍しいとの判断で、創設を促されました。行政書士の羽滝義治先生（NPO 心理教育実践センター現理事）を紹介していただき、申請からわずか半年で（2001年８月）、心理教育実践センターの名のもと NPO 法人が認可され、登録されました。この間マイクロカウンセリング研究会顧問の肥田野先生や理事のかたがたにもご相談し、メンバーの幾人かには発起人をお願いしました（NPO 心理教育実践センターニュースレター No. 1、および No. 2 参照）。当該 NPO は2002年５月に発会式を、そして同年８月にはアルカディア市谷私学会館において公開講演とマイクロカウンセリング実践を披露するセッションからなる２周年記念行事を開催しました。テーマは「人間援助のコミュニケーション」でした。ここではマイクロカウンセリングの研究・実践の統合の努力を堅持しながらその成果を広く社会的貢献に資するという姿勢を堅持しています。活動としてはコミュニケーション技法のトレーニングに限定し、いわゆる直接的な相談サービスは現在に至るも行っていません。

このようにして NPO 心理教育実践センターは別組織ではありますが、マイクロカウンセリング研究会とオーバーラップするメンバーも多く、目的に応じて共同で研修・トレーニングをおこなうこともあります。事務人材はマイクロカウンセリング研究会（のちに学会）と共同であるなど、運営面で負担が大きいのですが、所轄官庁より要請される責務（研修活動、報告など）をこなしております。近い将来はメンバーを増やし、当該学会と連携をたもちながら市民の支持を得て積極的に活動を展開・拡大していきたいと考えております。

日本マイクロカウンセリング学会への地固め ―研究会の学会化に向けて―

さて話はマイクロカウンセリング研究会にもどります。このような中、マイクロカウンセリング研究でなすべき課題がより明確になってきました。それは研究会では実践の一般化に耐えうる研究基礎をより強固にすることでした。この願望と期待がますます研究会に覆いかぶさってきました。そろそろいわゆる学会（現在の、日本学術会議承認の協力学術研究団体）の一員

に、という当初の願望が切実になりました。その承認団体である学術会議はすでに文部科学省ではなく、独立法人としての学術会議でありましたが、筆者はそちらに足を運び、情報を収集しながら、顧問である肥田野先生をはじめ、個々に会員の先生がたのご意見を伺いました。そこでは研究会を学会にすることにはおおむね賛成していただけましたが、若干の懸念として時期尚早という意見（これを支える若手研究者養成には時間がかかる、事務人材の不足などの理由で）、学会の名称をどうするか、などの意見が出ました。名称についてはそのままマイクロカウンセリング学会とするか、この学会の性格ならびに将来活動をみこして、心理教育（サイコエデュケーション）学会とし、名称においてNPOと整合性をもたせるかなどでした。それぞれメリット、ディメリットがあるようです。前者とすることのメリットは予定学会は20余年来続けてきたマイクロカウンセリング研究会の発展的なものであるから、内容的にもここで掲げたフィロソフィイを自覚することができる、知るひとぞ知る名称でもある。一方、ディメリットとしては名称からくるイメージが狭いかもしれないなどでした。その点、後者の名称では適用範囲が広がることを期待させるかもしれないが、イメージが拡散する、よってマイクロカウンセリングがますます一人歩きする危険性もある、などのディメリットが生じるかもしれない、などがありました。メリットとしてはマイクロカウンセリングがもともとそなえている心理教育的要素を前面に打ち出すことができる、などでした。

このような問題をかかえながら研究会は続けられましたが、平成17年の研究会総会において、まず、学会化することについて賛否を問いました。結果引き続き基礎固めのため、若い研究者・実践家の養成を必要とするとしながらも、学会化することについては、満場一致で賛同を得ました。申請の時期については少し余裕をもって準備をととのえてからということになり、とりあえず名称のみ学会とするということになりました。そこでこの総会直後より、研究会は日本マイクロカウンセリング学会と改名しました（ニュースレターNo. 17参照）。これにともない、会としてもよりアカデミックな方向に―実践といえども理論との統合、研究の開発などを心がけるという本来の姿勢ではありますが―自覚が促されました。具体的行動としては、まず、従来年一度発行していた研究集会報告書（小冊子）を「学会誌」のスタイルとし（APAスタイルにもとづいて完成し投稿された原著論文につきレフリーの審査を経て掲載する）、そして学会誌名を「マイクロカウンセリング研究」としました。実際これは申請時までに4巻発行されました。

会則は研究会当時その趣旨にしたがって専門家により成文化されていましたが（1984、1997）、今回もその趣旨を入れつつ、学術会議協力学術研究団体のそれによりふさわしいものになるよう、国内外主要学会の会則を参考にして原案を作成しました。これには、山口忠厚先生（現学会相談役）にご協力をお願いし、この原案につき肥田野先生（学会顧問）、玉瀬先生（現学会理事）、冨安先生（現学会理事）、鈴木祐弘先生（現学会監事）、小櫃重秀先生（現学会相談役）、森山賢一先生（現学会事務局長）に検討をお願いしました。さらに成文化に際しては松阪健治先生（現学会相談役、弁護士）のお力を拝借しました。

趣意書は筆者が原案を作成し、上記のかたがたにご検討いただきました。これは一口に当該学会がそのフィロソフィイ（理論と実践の統合の研究の開発およびその一般化の研究・開発と実行）を貫く姿勢を保ちこれを発展させて、社会的にも貢献しうる「実学の学」を追求するというものです。そこではマイクロカウンセリングを基本としながらも広い視野で学ぶ若い研究者・実践家、マイクロカウンセリングを活用して現場での研究・実践を追うパラプロフェッショナルのかたがたをも励ますものです（会則および趣意書は、ニュースレターNo. 19参照）。またこれは、国内・外の人材養成にも目を向け

ています。

研修会については、これまでも堅実にアイビイのモデルが守られてきた研修(トレーニング)ではありましたが、これをより体系的に積み上げていく研修のスタイルとして会員に提供することが期待されました。これらは早速実行されました。その他、学会員の増員や研究の強化などが期待されました。

学会誌（申請時から遡って最低３巻刊行されていること)、会則、学会の趣意書は、役員名簿、会員数などとともに学会申請時に必要なものでした。学会申請のための検討委員会は事実上前記した先生方で構成されておりました。折々に、個々の課題ごとに、それぞれの先生方と個別に、あるいは全体会議の中で検討を重ねました（平成17年後半から平成19年前半)。この間、筆者がかかわらせていただいた大学（常磐大学と仏教大学など）の卒業生がそれぞれ研鑽をかさねられ、会員としてマイクロカウンセリング研究会・学会にも熱心に参加されておられました。今回は検討委員会への直接的な参加はいただきませんでしたが、小グループでの研究会などの折にいただいたご意見なども参考にさせていただきました。 近未来的にはその他の若手会員のかたがたとともに、心強いグループとして学会を支えていただけるものと確信しております。

学会認可に向けての申請

かくして学会申請の諸条件について充足の見通しが立ちましたので、平成19年８月の総会時には正式に学会申請を審議事項とし、会員諸氏の賛成を得、その直後の同８月、日本学術会議に申請書を提出しました。これは受理され、約４ヶ月の審査期間を経て平成19年12月24日付で承認されました。若干の準備・調整をおこない、会計年度の始まる平成20年４月より日本マイクロカウンセリング学会は名実ともに学術会議承認の協力学術研究団体の一員としてスタートしました（マイクロカウンセリングニュースレター Nos. 17、18、19参照)。以下に肥田野顧問先生のおことばを拝借し、その使命と重責を認識しておきたいと思います。

「学術会議は日本の科学者の代表として諸学会の連携強化と国際交流に関する活動をおこなっておりますが、今後本学会も独自の発展をはかると同時に学術会議のネットを通じて学術情報を共有し、会員諸氏にも役立てることになります。とくに本学会がカウンセリングの実践やカウンセラー養成という両面からの社会的貢献の使命もかかえており、NPO と表裏一体となって進める仕事です。会員の皆様には両者のバランスを考えながらさらにご活躍下さることを期待しております。」(肥田野直　マイクロカウンセリングニュースレター No. 19より引用)

日本マイクロカウンセリング学会の現状

平成20年３月23日には平成20年度第一回研究会のメインイベントとして研修会をおこないました。ここで一寸紛らわしいので説明をしておきたいと思います。研修会はマイクロカウンセリング研究会時代から定期的に（原則として年２回）それをおこなってきましたが、これをより目にみえるかたちで体系的なものに位置づけることを狙い、学術会議認定以前から（平成19年３月より）強化しています。学術会議認定後の現在もその姿勢は守られており、今後も「学会」によりふさわしい研修会を開催してまいります。現在のところ資格・認定につながるものとしては考えておりませんが、マイクロカウンセリングを通して堅実な基礎をそなえたカウンセリング研究者／実践家を養成するプログラムです。学習では実践に‘役立つ’カウンセリングを身につけることができます（マイクロカウンセリングニュースレター No. 19参照)。これについてはその姿勢が会の内外に浸透しつつあるようです。 またこれは折々にNPO心理教育実践センターとの共催も行います。平成20年８月に施行した研修会において、予定通り当初のこころみ（基礎トレーニング１、２およびアドバンスドトレーニング１、２）が一巡しました。

次回からは２巡目が始まります。

学会誌「マイクロカウンセリング研究」は順

調にすすみ、本号は５冊目の Vol. 4、No. 1です。マイクロカウンセリングニュースレターは年二度の刊行をこなし、その間の出来事と特筆すべきことがらなどを明細に報じています。

学術会議協力学術研究団体としては年次の総会とそれに隣接して開催される学術研究集会は重要なイベントのひとつです。学術会議認定団体に承認されて最初（第一回）の学術研究集会は、平成21年３月21、22日の両日、アルカディア市谷私学会館で開催される予定です。全体テーマは人間の精神的健康への援助―日本マイクロカウンセリング学会設立にあたって―です。先述のとおり、今回は学会設立後第一回となるものであり、マイクロカウンセリングを確認・啓発する使命を負った学会としてこれを内外の同学のかたがたにその「研究と実践および適用・活用を考える」という姿勢をお分かちする計画です。プログラムは基調講演、シンポジウム、研究発表（口頭）と研修会から成ります。開催は本号の刊行と同時期になるでしょう。学術集会企画・運営委員会（準備委員会）の諸先生、ご参加くださる方々に御礼を申しあげます。今回は NPO 心理教育実践センターの後援となります。同様にご支援いただいた諸学会、日本心理学会（協賛）、日本応用心理学会（後援）、産業・組織心理学会（後援）、日本健康心理学会（後援）、それにアイビイマイクロトレーニングアソシエイツに御礼を申し上げます。 既存の大きな学会とは異なり、今回は当番校をお願いしなかったため、学術研究集会企画・実行委員会（臨時）が事実上準備委員会として、学会長が準備委員長としてこれを企画・運営するという形としました。準備委員会は、学会所属の各委員会委員長を含む若干のメンバーで構成され、その企画・立案は理事会の採決を受けるという形をとりこれを実行に移しました。実行には多くの会員諸氏のご協力を得ました。なにぶんこのような形での開催は不慣れなため、至らぬことも多々ありましたかと思います、ご容赦いただきますようお願いいたします。

これに先立ち述べておかなければならないことがあります。それは学会の組織・運営に関してです。学会の運営には役員として以下のかたがたが役割をとってくださっております。顧問（肥田野先生、アレン・アイビイ先生、メアリ・アイビイ先生）、理事（学会長および玉瀬先生、冨安先生、岡村一成先生、仁科先生、山本孝子先生）、監事（鈴木先生）。相談役（山口先生、松阪先生、小櫃先生）。それに事務局（事務局長：森山先生、事務書記：田村真知子会員、嘱託：久野洋子会員）です。

また学会の企画・運営を促すための委員会として、機関誌編集委員会、研修委員会、広報委員会、財務委員会を常設としました。学術集会企画・運営委員会と出版企画・実行委員会を臨時の委員会としておいています。まだ学会が小規模のため、現在はすべての委員会に独立的機能を期待できませんが、それでもこのうち機関誌編集委員会と研修委員会はその性格上比較的独立性が強いものと考えます。そこでたとえば機関誌への執筆応募等に関しては、学会事務局気付け機関誌編集委員長宛に、研修会参加に関しては学会事務局気付け研修委員長宛にお願いしたいと思います。広報委員会では、常に新しい情報などをホームページに掲載する姿勢でおりますので、適宜ご注目ください。会員申し込みや会費に関することがらは、直接事務局にご連絡ください。学術研究集会に関するお問い合わせ等は学会事務局気付け、学術研究集会準備委員会にお寄せください。事務局では当該学会組織（理事会、各種委員会など）がスムーズに機能するよう、また会員各位とのコミュニケーションの円滑化がはかれるよう、事務的統括・処理の仕事をお願いしております（ニュースレター No. 19ならびに HP をご参照ください）。いうまでもなく組織運営の主役は会員の皆様方であることをあらためてご認識いただき、さらなるご協力をいただけますれば幸いです。

日本マイクロカウンセリング学会
今後の課題と抱負

カウンセリングと一口にいっても、概念化さ

れるものは多様です。さらにそれが実践と結びつくとき、これはさらに多様になります。事実それは当初思いもよらなかったであろうような使われ方がされていることもあるように思います。なにがよいか、なにがよくないかをいまさら問うことは差し控えたいと思いますが、すくなくも私どものマイクロカウンセリング学会は一貫して当初の目的を貫いていくことができるであろうと思っておりますし、またそうありたいと思います。趣旨一貫して「実学の学」を追求すること、そのためには「基礎をふまえた実践」の「研究と実践」を行うものであることを忘れないようにと思います。折角私たちは「人間援助」の最適のいや最高の基本的モデル、「マイクロカウンセリング」に出会ったのですから。マイクロカウンセリングから学ぶことは多く、その追究の道のりは長く困難もあるかもしれません、でも私たちはそれを押し進めることのできる素材(宝)を手にしていると思います。このような私たちは決してそれを無駄にすることなく、それぞれの立場で、それぞれの目的に向かって研鑽していかなければならないかと考えます。かく申します筆者自身、さきの二つの約束—‘一人ひとりの存在’の‘文化’を理解し、日本的（マイクロ）カウンセリングの創造に励むこと—はまだまだその緒についたばかりです。

学会としては今後の発展を促す手がかりとして、会員諸氏に、より多くの研究・研鑽・実践の機会・場を提供する、また「基礎学習と実際の統合」を模索するという学会のフィロソフィイを受け継ぐ人材の養成を行う、などを進めてまいりたいと思っております。これらを基盤に、日本におけるマイクロカウンセリングが肩身の狭い(？)思いをしないよう、堂々と王道を歩み、より多くのひとびとの精神的健康に貢献しうる学会となるよう、願っております。これはひいては社会的貢献、国際的貢献にも繋がっていくものでしょう。皆々様とご一緒に励んでまいりたく存じます。

マイクロカウンセリング研究会の学会化はやはり大きな変化でした。望んでいたこととはいえ、その存在と学会の果たす役割において、社会的にも重責を担うことになりましたことを日々実感しております。今後とも公私共によろしくお願い申し上げます。

おわりに

ふたたびいささか私的な思惑に戻らせていただきたいと思います。アイビイ博士が創始したマイクロカウンセリングを学習して筆者はまず「人間の存在のとらえ方」があることを学びました。またそれを意識することによって、それへのかかわり、アプローチがあることを学びました。意図性を重視するマイクロカウンセリング技法はそのことを伝えるものでその選択・設定のプロセスにおいてはひとりひとりの人間を尊重することなしには不可能であったであろうと気づきました。それゆえ、一人ひとりの存在を尊重することなしに、これら技法は使いこなせないものだとも気づきました。このことを理解すれば、「個人尊重」あるいは「個人の尊厳」など抽象的なことばが独り歩きすることはないでしょう。

関連して大切なことに気づきました。カウンセリングを学ぶものにとって、「倫理的配慮」に関することは大変大きな問題です。これはいろいろなところで叫ばれております。しかしこれも単に、「個人情報を守る」、とか、「秘密厳守」など言葉が先行し実行がともないにくいといったレベルのものではないようです。‘カウンセリング的かかわり’をこよなく大切にするカウンセラーには必然的にその行動が身につくもの、自分ならびに他者を守る倫理的行動が、姿勢が、身につくものだと思います。こうしてカウンセリングの効果も上がるのだと思います。小手先の技術(？)をむさぼっていては、そのような報酬(？)は得られません。これはカウンセリング関係においてのみではないでしょう。人間として大切なことに気づかせていただき、マイクロカウンセリングを学ぶものはしあわせなのだと思いました。

ここではまた人間の多様性にかかわるカウン

セリングについて、「アートかサイエンスか」という先達の論証を強烈に思い出させていただきました。それにつけても人間を対象とするカウンセリングの学習において、先達によって思索された歴史的論考を顧みることが大切なことに気づきました。この必要はやはり、生ある人間を丁寧に観察・扱うことによって生じるものでしょう。

このことは自分自身が生み出した研究・実践結果への責任についてもいえましょう。たとえばマイクロカウンセリングの象徴ともいえる、‘あの三角形’についても、アイビイ先生は原型を保ちながら、何回かの修正をこころみています。その中でもとくに、技法の位置づけについて‘かかわり’の重要性を示す変更（1995）、多重文化的人間の理解を促すととらえられる形への変更（2001、2007）などはそれを示していると思います。またアイビイ先生は最近、個人をmulticultural な存在としてとらえる際のモデルとして RESPECTFUL モデルを再活用しようとされております。自身の研究に忠実であれば、時系列的には以前の所産であっても、その後の研鑽プロセスの中で、古いものをみ直すという姿勢も大切だと思いました。関連して、最近のお便りによると博士は、問題解決カウンセリングやキャリアカウンセリングへのサイコエデュケーションのアプローチの有用性を再認し、マイクロカウンセリング技法の積極技法（‘情報提供’、‘アドバイス’、‘指示’）などはまさにフルにそれらへの使用（一般化した使用）が有用である、いや、そのためにそれらはあるのであろうと気づかれたそうです。

アイビイ先生のアイディアとマイクロカウンセリングから、実に多くのことを学ばせていただいております。この偉大なるマイクロカウンセリングのメンター、アレン・アイビイ先生とよきパートナーであるご夫人、メアリ・アイビイ先生に心から感謝申し上げます。

会員の皆々様、拙文をお読みいただきありがとうございました。ご自愛くださいますよう。

原 著 論 文

微笑みの有無とタイミングがカウンセラーの印象に及ぼす影響

山口 沙矢香　　山本 眞利子
（福岡県スクールカウンセラー）（久留米大学）

研究１では，学生によって演じられたカウンセラーがクライエントの相談内容を聴いた後で微笑む条件と微笑まない条件を設定した。そして，この条件が異なるカウンセリング場面のビデオを大学生に見せ，有無条件のカウンセラーの純粋性，共感性，有能性について評定させた。その結果，微笑み無条件より微笑み有条件でカウンセラーの尊重性得点が高かった。研究２では，カウンセラーが微笑むタイミングが異なる条件を設定した。初期条件ではカウンセラーが面接の初期で，中期条件では面接の中期で，後期条件では面接の後期で微笑むビデオを大学生に見せカウンセラーの印象を調べた。その結果，カウンセラーが中期で微笑む条件ではカウンセラーの純粋性得点が低かった。これらの結果は，カウンセラーが微笑むことで，カウンセラーはクライエントを尊重していると評定され，カウンセラーが中期で微笑むことでカウンセラーは純粋ではないと評定されたことを示している。

キーワード：微笑み，タイミング，純粋性，尊重性

問題

マイクロカウンセリングはアイビイ（1985），福原・アイビイ，アイビイ（2004）が開発し展開しているカウンセラー養成のためのプログラムである。マイクロカウンセリングは，“いずれの面接にも共通なカウンセリング技法を取り上げて階層化し，基礎的・基本的な初級技法を下層に位置づけ，上級技法を上層に位置づけている”（山本，2007）。本研究で扱う微笑のノンバーバル行動は，マイクロカウンセリングの階層表では，基本的なかかわり行動として下層に位置づけられる。つまり，微笑みは，カウンセリングを行う上で，カウンセラーが身につけておかねばならない最も基本的な技法と言える。

微笑みの他，ノンバーバル行動にはアイコンタクトやジェスチャー，表情，声の質やクライエントに対し正面に座るか，斜めに座るか等といった座る位置も含まれる（菅野，1982；Mehrabian，1969，1970）。

Strong，Taylor，Bratton，& Loper（1971）では，面接場面で座る姿勢を変えたり，微笑んだり，手を振るといった多くのノンバーバル行動を示すカウンセラーのほうが，ノンバーバル行動をあまり示さないカウンセラーより魅力的だと大学生に評定されたことを示した。しかし，微笑みだけを扱った研究は今のところ見られず，微笑みのみの印象については明らかになっていない。そこで，本研究では，微笑みに焦点を当て，微笑みの有無，微笑みのタイミングがカウンセラーの印象に及ぼす影響について検証する。なお，本研究では，第３者によるカウンセラー評定を行う。方法としては，大学生の参加者に自分をクライエントに置き換えてもらう。だが，このような方法を行った場合，参加者の共感性の違いが評定に影響する。そこで，本研究では共感性の高い参加者，低い参加者を対象とし，参加者の共感性の違いと微笑みの有無，微笑みのタイミングの違いがカウンセラー印象評定に及ぼす影響について検証する。

第１研究

目的

本研究では共感性が高い参加者，低い参加者にカウンセラーの微笑みの有無が異なるビデオを見せ，自分がクライエントだとしたらカウンセラーについてどのように思うかでカウンセラー印象評定に評定させる。仮説としては，共感性の高い群において，微笑み有条件のビデオを見たときのほうが，微笑み無条件のビデオを見たときよりカウンセラーの印象が高く評定されると考えられる。

方法

実験計画

２群（共感性高・低）× ２条件（微笑み有・無）の２要因混合計画。

参加者

実験の趣旨を説明し，同意が得られたＫ大学の学生32名（男性12名，女性20名，平均年齢20.41歳）。そのうち記入漏れや記入ミスがあった者を除き有効回答者30名（男性10名，女性20名，平均年齢20.46歳）を分析の対象とした。参加者を共感性尺度得点（後述）の平均値21.1点で２群に分け，21.1点以上を共感性高群15名（平均値24.8，標準偏差2.51），21.1点未満を共感性低群15名（平均値17.4，標準偏差3.68）とした。t検定の結果，両群の間には有意差が示された（$t(28)=6.21$，$p<.01$）。

実験日

実験は，2007年７月４日，12日，13日に実施した。

材料

・ビデオ

カウンセラー役は大学院生の20代の女性で，クライエント役も大学院生の20代の女性であった。カウンセラー役はビデオに向かって正面から撮影され，クライエント役は背後から肩と頭の部分のみが写るよう撮影された。ビデオの内容は大学生活で友人ができないという悩みに関するもので，カウンセラー役，クライエント役共に台本に沿ってカウンセリングを行ったものである。ビデオには，約１分間のカウンセリング場面が２つ収められている。各場面の相違はカウンセラーの微笑みの有無のみであり内容は同じだった。微笑みの有無条件の評定はそれぞれの場面について10人の評定者にカウンセラーが微笑んでいると思うかについて，“そう思わない”を１点，“あまりそう思わない”を２点，“どちらでもない”を３点，“ややそう思う”を４点，“そう思う”を５点とする５件法で評定させた。微笑み有条件は，平均値3.80，標準偏差0.75，微笑み無条件は平均値1.40，標準偏差0.63だった。t検定の結果，両条件の間には有意差が示された　（$t(8)=8.54$，$p=<.01$）。

・台本

台本の内容は以下のとおりである。

Th ①「こんにちは，相談員の〇〇です。本日はどのようなご相談ですか？」

Cl ①「あ，はい。今年大学に入学したばかりなんですけど，何ていうのかな周りはすごい楽しそうなんですけど，なんか大学が面白くないんですよね……。」

Th ②「大学が面白くない。うーん」

Cl ②「あ，はい。…何で学校に来てるのかな，とか思ったりして」

Th ③「学校はどうされているんですかね？」

Cl ③「そうですね，まあ休まずに」

Th ④「<u>学校は休まれてないんですね</u>」

Th ④の下線部で微笑み有条件はカウンセラーが微笑んでおり，微笑み無条件ではカウンセラーは微笑んでいない。

・尺度

①多次元的共感性尺度

登張（2003）が作成した共感性を多次元から測定する尺度。ファンタジー（小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入する）の項目を使用。ファンタジーの項目は以下のとおりである。「小説を読むとき，登場人物の気持ちになりきってしまう」，「テレビゲームの主人公になりきるのが好きだ」，「テレビや映画を見た後は，自分が登場人物の一人のように感じる」，

「本を読むときは，主人公の気持ちを考えながら読む」，「面白い物語や小説を読むと，そのようなことが自分に起こったらどのように感じるかを想像する」，「ドラマや映画を見るとき自分も登場人物になったような気持ちで見ることが多い」の６項目である。“当てはまる”を５点，“やや当てはまる”を４点，“どちらともいえない”を３点，“あまり当てはまらない”を２点，“全く当てはまらない”を１点とした５件法である。したがって，得点は６点から30点までの範囲で分布する。

②カウンセラー評定

玉瀬（1998）が作成したノンバーバル行動に関わるカウンセラーの基本的態度の評定尺度。測定可能と思われるカウンセラーの態度として，純粋性（「誠実な」「熱心な」「自然な」「率直な」），尊重性（「親しみやすい」「あたたかい」「受容的な」「礼儀正しい」），有能性（「自信に満ちた」「積極的な」「安定した」「熟練した」）の計12項目である。“全くあてはまらない”を１点，“ほとんどあてはまらない”を２点，“あまりあてはまらない”を３点，“ややあてはまる”を４点“かなりあてはまる”を５点，“非常にあてはまる”を６点とした６件法である。

手続き

実験は，８人ずつの小集団で実施した。実験に要した時間は約20分だった。参加者をビデオが用意された部屋に通し，画面が見やすい席に着くよう教示した。その後共感性尺度を評定させた。続いて「これから皆さんにカウンセリングの１シーンを見ていただきます。２種類見ていただきますが内容は変わりません。今からビデオを流します。自分をこのクライエントに置き換えてビデオを見てください」という教示を行った。参加者の約半数にはビデオを微笑み有条件→微笑み無条件の順番で見せ，それぞれの条件でカウンセラー評定尺度に評定させた。評定は，「もし，あなたがこのクライエントだとしたらカウンセラーの印象はどのようなものか」という教示に従い評定させた。なお，参加者の残り半数には，微笑みの提示順序を入れ替え微笑み無条件→微笑み有条件の順番でビデオを見せ，同様に評定させた。

結果

１）カウンセラー評定総得点の分析

カウンセラー評定総得点において２群（共感性高・低）× ２条件（微笑みの有・無）の分散分析を行った。カウンセラー評定総得点の平均，標準偏差，分散分析の結果を表１に示す。純粋性得点，有能性得点においては，群，条件，交互作用いずれも有意差は示されなかった。尊重性総得点においてのみ条件の主効果が示された（$F(1,28)=7.65$，$p<.01$）。これは微笑み有条件の方が微笑み無条件に比べ尊重性得点が有意に高いことを示している。

２）カウンセラー評定項目ごとの分析

カウンセラー評定の各項目において２群（共感性高・低）× ２条件（微笑みの有・無）の分散分析を行った。カウンセラー評定項目ごとの平均と標準偏差，分散分析の結果を表２に示す。純粋性のいずれの項目得点においても群，条件，交互作用に有意差は示されなかった。尊重性においては「親しみやすい」得点においては群（$F(1,28)=4.54$，$p<.05$），条　件（$F(1,28)=8.05$，$p<.01$）の主効果が有意であった。これは微笑み有条件の方が微笑み無条件に比べて得点が高いことを示している。また，共感性高群の方が共感性低群に比べて得点が高いことを示している。「あたたかい」得点においては条件の主効果が有意であった（$F(1,28)=13.66$，$p<.01$）。これは微笑み有条件の方が微笑み無条件に比べて得点が高いことを示している。「受容的な」得点においては条件の主効果が有意であった（$F(1,28)=4.80$，$p<.01$）。これは微笑み有条件の方が微笑み無条件に比べて得点が高いことを示している。有能性においては「積極的な」得点においてのみ条件の主効果が有意であった（$F(1,28)=4.26$，$p<.05$）。これは微笑み有条件の方が微笑み無条件に比べて得点が高いことを示している。

表１　カウンセラー評定総得点における平均と標準偏差及び *F* 値

	共感性（高）				共感性（低）						
	微笑み（有）		微笑み（無）		微笑み（有）		微笑み（無）		群	条件	交互作用
総得点		（　）		（　）		（　）		（　）	値(1,28)	値(1,28)	値(1,28)
純粋性	15.00	(3.43)	13.87	(3.16)	15.67	(3.26)	14.07	(3.66)	0.25*ns*	2.11*ns*	0.06*ns*
尊重性	16.00	(3.97)	12.40	(4.14)	14.40	(4.13)	11.20	(4.65)	1.88*ns*	7.65**	0.02*ns*
有能性	13.53	(4.01)	12.87	(3.12)	14.07	(3.19)	12.80	(5.27)	0.03*ns*	1.19*ns*	0.11*ns*

＊＊ $p < .01$

表２　カウンセラー評定総得点における平均と標準偏差及び *F* 値

	共感性（高）				共感性（低）						
	微笑み（有）		微笑み（無）		微笑み（有）		微笑み（無）		群	条件	交互作用
項目		（　）		（　）		（　）		（　）	値(1,28)	値(1,28)	値(1,28)
純粋性											
誠実な	3.87	(0.81)	3.53	(1.09)	3.67	(1.25)	3.53	(1.36)	0.09*ns*	0.64*ns*	0.11*ns*
熱心な	3.73	(0.85)	2.87	(1.09)	3.60	(1.20)	3.27	(1.48)	0.17*ns*	3.64*ns*	0.71*ns*
自然な	3.73	(1.29)	3.80	(0.75)	4.27	(1.00)	3.73	(0.77)	0.91*ns*	0.70*ns*	1.17*ns*
率直な	3.67	(0.94)	3.67	(0.94)	4.13	(1.02)	3.53	(1.02)	0.38*ns*	1.36*ns*	1.36*ns*
尊重性											
親しみやすい	4.00	(1.15)	2.73	(1.18)	3.20	(1.33)	2.33	(1.30)	4.54*	8.05**	0.28*ns*
あたたかい	4.07	(1.24)	2.60	(0.88)	3.60	(1.36)	2.53	(1.45)	0.67*ns*	13.66**	0.34*ns*
受容的な	4.20	(1.11)	3.33	(1.45)	3.73	(1.29)	2.87	(1.50)	2.14*ns*	4.80*	0.00*ns*
礼儀正しい	3.73	(1.00)	3.73	(1.00)	3.87	(0.88)	3.47	(1.09)	0.05*ns*	0.70*ns*	0.70*ns*
有能性											
自信に満ちた	3.13	(1.26)	3.13	(0.96)	3.67	(1.53)	3.00	(1.41)	0.23*ns*	1.43*ns*	1.43*ns*
積極的な	3.33	(1.08)	2.47	(0.88)	3.47	(1.15)	3.13	(1.54)	1.37*ns*	4.26*	0.84*ns*
安定した	3.67	(0.94)	3.73	(1.00)	4.20	(0.75)	3.60	(1.40)	0.44*ns*	1.06*ns*	0.65*ns*
熟練した	3.40	(1.25)	3.53	(1.02)	2.93	(1.06)	2.87	(1.45)	2.66*ns*	0.01*ns*	0.11*ns*

＊ $p < .05$　＊＊ $p < .01$

考察

カウンセリング場面におけるカウンセラーの微笑みの有無がクライエントによるカウンセラーの印象評定に及ぼす影響について，ビデオを用いて検証した。その結果，カウンセラー評定における有能性の項目「積極的な」において微笑みの主効果が有意であったことから，カウンセラーが微笑むことで，カウンセラーはクライエントに積極的に関わっていると評定されたことが示された。

カウンセラー評定における「尊重性」総得点において微笑むほうが微笑まないよりも得点が高かった。これは，カウンセラーが微笑むほうがよりクライエントを尊重していると参加者が評定したことを示している。ここで用いられた尊重性とはクライエントに対する「親しみやすい」,「あたたかい」,「受容的な」,「礼儀正しい」等の態度のことである。その中でも「親しみやすい」,「あたたかい」,「受容的な」で微笑みの主効果が有意であったことから，カウンセラーが微笑みを浮かべることで，クライエントはカウンセラーに対して親近感や，あたたかさ，受容的雰囲気を感じることが示唆された。

また,「親しみやすい」において有意な群（共感性）の主効果が見られたことから，共感性の高い人は共感性の低い人よりもカウンセラーに

対し親しみを感じやすいことが示された。これは，クライエントに自分を置き換える能力が高い参加者の方が，微笑んでいるカウンセラーに対して，親しみやすさを感じると評定されたことを示唆し，真のクライエントも微笑んでいるカウンセラーに対して親しみやすさを感じることが推測される。しかし，この点に関する詳細な検証は今後の課題である。

なお，頷きに関する研究ではあるが玉瀬・石田（1995，1996）は“会話の中でのクライエントに対するカウンセラーの頷きの回数が少ない場合には，カウンセラーが会話のどこで頷くかによって印象が異なる”ことを示している。同様のことは，微笑みにも言えるのではないだろうか。そこで，研究２では，微笑みのタイミングがカウンセラーの印象に及ぼす影響について検証する。

第２研究

目的

本研究では，第１研究を元に，カウンセラーが微笑みを浮かべるタイミングによって，カウンセラーの印象に違いが生じるのかどうかを検証する。タイミングは，カウンセリングにおける一連の会話の初期，中期，または後期に微笑みを挿入することによって区別する。仮説としては，共感性高群において，カウンセラーが面接の後期に微笑む場合は，クライエントが全て話した後に微笑むことになるため，印象評定値が高くなると考えられる。一方，カウンセラーが面接の中期で微笑む場合は，カウンセラーがクライエントの話の途中で微笑むことになるため印象評定値が後期より低いと考えられる。

方法

実験計画

２群（共感性高・低）× ３条件（微笑みのタイミング初期・中期・後期）の２要因混合計画。

参加者

実験の趣旨を説明し，同意を得られたＫ大学の学生71名（男性25名，女性46名，平均年齢22.52歳）のうち記入漏れや，記入ミスがあったものを除き66名（男性23名，女性43名，平均年齢20.10歳）を分析対象者とした。参加者を共感性尺度得点の平均値21.4点で２群に分け，21.4点以上を共感性高群33名（平均値24.1，標準偏差1.76），21.4点未満33名を共感性低群（平均値18.6，標準偏差2.19）とした。t 検定を行った結果，両群の間には有意差が示された（$t(64) = 10.98$，$p < .01$）。

実験日

実験は，2007年11月１日，11月８日に実施した。

材料

・ビデオ

カウンセラー役，クライエント役は第１研究と同一人物だった。カウンセラー役はビデオに向かって正面から撮影され，クライエント役は背後から肩と頭の部分のみが写るように撮影された。会話の内容は大学生活で友人ができないという悩みに関するもので，カウンセラー役，クライエント役共に台本（後述）に沿ったものだった。カウンセリングの一連の会話は約５分程度だった。同じ会話内容の初期，中期，後期で微笑む３本のビデオが作成された。各ビデオの相違は（1）カウンセラーがカウンセリングの初期に微笑む，（2）中期に微笑む，（3）後期に微笑む，という微笑むタイミングのみだった。微笑みは，初期では，カウンセラーが「学校は休まれていないんですね」，中期では，「一人でも学校に来られているんですね」，後期では「色々工夫されてきたんですね」とクライエントを労い褒めた後に１回だけ示された。これは，できるだけカウンセラーの発言を統一することで文脈の影響を除くためだった。なお，初期，中期，後期で行ったカウンセラーの微笑みの程度が異なると評定に影響がでるため，予め初期，中期，後期について，９人の評定者にカウンセラーが微笑んでいるかどうかを“そう思わない”を１点，“あまりそう思わない”を２点，“どちらでもない”を３点，“ややそう思う”を４点，“そう思う”を５点とする５件法で評定させた。そ

の結果，微笑み初期の平均値3.89，標準偏差1.11，微笑み中期の平均値4.00，標準偏差1.00，微笑み後期の平均値4.11，標準偏差1.11だった。F検定を行った結果，３条件間で有意差は示されなかった。($F(2,8)=0.11$，ns)

・台本

台本の内容は以下のとおりであり，Th①～Th④までは第１研究と同様であった。

Th①「こんにちは，相談員の○○です。本日はどのようなご相談ですか？」

Cl ①「あ，はい。今年大学に入学したばかりなんですけど，何ていうのかな周りはすごい楽しそうなんですけど，なんか大学が面白くないんですよね……」。」

Th②「大学が面白くない……。うーん」

Cl ②「あ，はい。…何で学校に来てるのかな，とか思ったりして」

Th③「学校は今，どうされているんですかね？」

Cl ③「まあ休まずに」

Th④「学校は休まれてないんですね」（初期）

Th⑤「何で学校に来てるのかなって思われるのはどんなときですか？」

Cl ⑤「どんな時？うーん授業始まる前とかお昼？授業の後かな。居場所がないような感じがするんです。」

Th⑥「居場所がないような感じ？もう少し具体的に教えていただけますか？」

Cl ⑥「あの……授業始まる前とか後ってなんかざわざわしてるじゃないですか。あの時とかって，身の置き場がないような気がするんです。周りは楽しそうに喋ったりしているんですけど。喋る人もいなくて一人でただその場にいるって感じで。でも親に心配かけたくないから休むわけにもいかないし」

Th⑦「一人だと，寂しいんじゃないですか？」

Cl ⑦「そう，ですね……。」

Th⑧「一人でも学校に来られてるんですね」（中期）

Cl ⑧「まあ，一応……。来てはいるんですけど…。どうやって友達作ればいいかわからなくて入学してからずっと…」

Th⑨「ああ，ずっと……」

Cl ⑨「何かいろいろやったりはしてるんですけど」

Th⑩「友達を作るために例えばどんなことをされたんですか？」

Cl ⑩「……そうですね，授業始まる前に挨拶してみたりとかは」

Th⑪「他には何かされました？」

Cl ⑪「レポート提出の時に何処に出すのかとか聞いてみたりしました」

Th⑫「色々工夫されてきたんですね」（後期）

初期ではTh④でカウンセラーが微笑む条件であった。中期ではTh⑧で，後期ではTh⑫でカウンセラーが微笑む条件であった。

・尺度

①多次元的共感性尺度（第１研究で使用したものと同様）。

②カウンセラー評定（第１研究で使用したものと同様）。

③自由記述の質問紙（ビデオを見ての感想や思ったことを記入）。

手続き

実験は10人ずつの小集団で実施した。実験に要した時間は約40分だった。参加者をビデオが設置された実験室に通し，画面が見え易い席に着くよう指示した。その後共感性尺度に評定させた。続いて「これから皆さんにカウンセリングの１シーンを見ていただきます。内容は変わりませんがカウンセラーが微笑んでいるタイミングが違います」，「今からビデを流します。自分をこのクライエントに置き換えてビデオを見てください」という教示を行った。参加者の３分の１に微笑み初期→微笑み中期→微笑み後期の順番でビデオを見せ，それぞれについてカウンセラー評定，自由記述を行わせた。評定は，「もし，あなたがこのクライエントだとしたらカウンセラーの印象はどのようなものか」で行わせた。別の３分の１に微笑み中期→微笑み後期→微笑み初期の順番でビデオを見せ，残りの３分の１には微笑み後期→微笑み初期→微笑み

中期の順番でビデオを見せ，同様に評定させた。

結果

1）カウンセラー評定総得点の分析

カウンセラー評定総得点において２群（共感性高・低）× ３条件（微笑みのタイミング初期・中期・後期）の２要因分散分析及び *LSD* 法を用いた多重比較を行った。カウンセラー評定総得点の平均と標準偏差，分散分析の結果を表３に示す。尊重性総得点，有能性総得点においては群，条件，交互作用のいずれも有意ではなかった。純粋性総得点においては条件の主効果が有意であった（$F(2, 128) = 3.25$, $p < .05$）。多重比較を行った結果，中期に微笑んだものと後期に微笑んだものに有意差が示された（$MSe = 5.41$）。これは，中期に微笑むよりも後期に微笑んだほうが得点が高いことを示している。

2）カウンセラー評定項目ごとの分析

カウンセラー評定の各項目において２群（共感性高・低）× ３条件（微笑みのタイミング初期・中期・後期）の２要因分散分析及び *LSD* 法を用いた多重比較を行った。カウンセラー評定の項目ごとの平均と標準偏差，分散分析の結果を表４に示す。純粋性の「誠実な」「熱心な」「自然な」各得点においては群，条件，交互作用のいずれも有意ではなかった。「率直な」得点において条件の主効果が有意であった（$F(2, 128) = 3.85$　$p < .05$）。多重比較を行った結果，中期に微笑んだ条件と，初期，後期に微笑んだ条件で有意差が示された（$MSe = 0.44$）。このことは中期に微笑むよりも初期，後期に微笑むほうが得点が高いことを示している。尊重性「親しみやすい」，「あたたかい」，「受容的な」，「礼儀正しい」各得点においては群，条件，交互作用のいずれも有意ではなかった。有能性の「自信に満ちた」，「積極的な」，「安定した」，「熟練した」各得点においては群，条件，交互作用のいずれも有意ではなかった。

考察

カウンセリング場面で，カウンセラーの微笑みのタイミングの違いが，カウンセラーの印象にどのような影響を及ぼすのかをビデオを用いて検証した。玉瀬・石田（1995）は“実際の面接場面におけるクライエントの視点と，VTR で評定を行った被験者の視点が果たして同じであるといえるのか”と述べている。そこで，本研究では参加者の共感性を測り，参加者に自分がもしクライエントだったらどう感じるかで評定してもらった。共感性の高い群においては真のクライエントの視点に近く，低い群においては第３者の視点に近いのではないかと考えた。しかし，本研究の結果，共感性高低での差が見られなかった。この結果から，共感性の高低よりも微笑みの影響の方が大きく，比較的視覚的にもわかり易い微笑みというノンバーバル行動においては，共感性の違いが影響し難いことが示唆された。

カウンセラー態度評定の「純粋性」総得点において中期で微笑んだカウンセラーより後期で微笑んだカウンセラーの方が高く評定されていた。これは，話の途中で微笑むことより，クライエントが頑張ったことを全て話し終えた後に，カウンセラーが微笑むほうがより純粋であると参加者は評定したことを示している。この点は，「はじめの人（中期に微笑んでいる）は２番目の（後期に微笑んでいる）に比べるとなんか頑張って笑ってますって感じ」，「最初の方（中期に微笑む）は，自分だけかもしれないけど，なんかぎこちなく見えた」という自由記述からも示唆される。また，純粋性の項目の中の「率直な」という形容詞では中期に微笑んだビデオが最も低く評定された。つまり，話の途中で微笑むことはカウンセラーから自然に出た行為ではなく，不自然な行為に参加者が感じたと言える。

カウンセラーの微笑むタイミングについては，カウンセラー応答の内容をできるだけ統一し，クライエントを労い褒めた後に，カウンセラーが微笑むように設定した。だが，カウンセラーがクライエントの話を最後まで聞き，クライエントを労った後でカウンセラーが微笑む方が，クライエントはカウンセラーによく理解しても

表３　カウンセラー評定総得点における平均と標準偏差及び *F* 値

	共感性（高）						共感性（低）									
	微笑み（初期）		微笑み（中期）		微笑み（後期）		微笑み（初期）		微笑み（中期）		微笑み（後期）		群	条件	交互作用	多重比較
総得点	( )		( )		( )		( )		( )		( )		値(2,128)	値(2,128)	値(2,128)	5%水準
純粋性	15.33	(2.41)	14.73	(2.30)	15.18	(2.26)	14.55	(3.03)	14.21	(2.46)	15.82	(2.98)	0.24*ns*	3.25*	1.74*ns*	中期<後期
尊重性	15.18	(3.34)	14.79	(2.93)	15.24	(3.14)	14.58	(3.83)	15.12	(3.47)	15.21	(3.34)	0.02*ns*	0.24*ns*	0.41*ns*	
有能性	13.36	(2.59)	13.45	(1.88)	14.24	(2.15)	13.24	(3.07)	12.82	(2.78)	13.61	(2.89)	0.83*ns*	2.87*ns*	0.36*ns*	

＊ $p < .05$

表４　カウンセラー評定総得点における平均と標準偏差及び *F* 値

	共感性（高）						共感性（低）									
	微笑み（初期）		微笑み（中期）		微笑み（後期）		微笑み（初期）		微笑み（中期）		微笑み（後期）		群	条件	交互作用	多重比較
項目	( )		( )		( )		( )		( )		( )		値(2,128)	値(2,128)	値(2,128)	5%水準
純粋性																
誠実な	4.03	(0.63)	4.00	(0.70)	4.09	(0.67)	3.88	(0.81)	3.85	(0.82)	4.27	(0.90)	0.09*ns*	2.75*ns*	1.29*ns*	
熱心な	3.58	(0.95)	3.52	(0.86)	3.64	(0.85)	3.45	(0.99)	3.52	(0.93)	3.82	(1.09)	0.01*ns*	1.34*ns*	0.51*ns*	
自然な	3.88	(0.77)	3.64	(0.95)	3.70	(1.00)	3.67	(1.06)	3.52	(0.86)	3.97	(0.80)	0.01*ns*	1.82*ns*	1.67*ns*	
率直な	3.85	(0.82)	3.58	(0.85)	3.76	(0.70)	3.55	(0.99)	3.33	(0.68)	3.76	(0.92)	1.28*ns*	3.85*	0.96*ns*	初期=後期>中期
尊重性																
親しみやすい	3.55	(1.08)	3.33	(0.97)	3.52	(1.13)	3.24	(1.13)	3.48	(1.02)	3.48	(1.16)	0.11*ns*	0.21*ns*	0.86*ns*	
あたたかい	3.48	(1.13)	3.52	(1.05)	3.52	(1.18)	3.42	(1.13)	3.73	(1.14)	3.67	(0.97)	0.28*ns*	0.53*ns*	0.34*ns*	
受容的な	3.97	(0.83)	3.88	(0.98)	4.12	(0.95)	3.88	(1.17)	3.79	(1.12)	3.88	(1.04)	0.68*ns*	0.51*ns*	0.14*ns*	
礼儀正しい	4.18	(0.76)	4.06	(0.55)	4.09	(0.51)	4.03	(0.97)	4.12	(0.98)	4.18	(0.80)	0.00*ns*	0.09*ns*	0.80*ns*	
有能性																
自信に満ちた	2.94	(0.89)	2.94	(0.78)	3.27	(0.83)	3.06	(1.10)	2.94	(0.85)	2.97	(0.97)	0.10*ns*	1.43*ns*	1.99*ns*	
積極的な	3.06	(0.92)	3.12	(0.77)	3.27	(0.83)	3.15	(0.93)	3.00	(0.95)	3.27	(1.02)	0.00*ns*	1.40*ns*	0.31*ns*	
安定した	4.12	(0.81)	4.03	(0.63)	4.21	(0.64)	4.00	(1.07)	3.91	(0.90)	4.09	(0.75)	0.65*ns*	1.16*ns*	0.00*ns*	
熟練した	3.24	(0.92)	3.36	(0.85)	3.48	(0.78)	3.03	(0.94)	2.97	(1.00)	3.27	(1.02)	2.57*ns*	1.92*ns*	0.30*ns*	

＊ $p < .05$

らったと感じるかもしれない。つまり，カウンセラーの印象評定には，カウンセラーが微笑んだ前後のカウンセラーとクライエントの会話の流れや文脈の適切さ，クライントの感じ方などが影響していることもあり，今後これらの点についても検証する必要がある。

総合考察

カウンセラー評定尺度における尊重性においては第１研究の微笑みの有無でのみ差が示され，第２研究のタイミングでは差は示されなかった。これは微笑みを浮かべることそのものが，クライエントを尊重しているという印象を抱かせやすいことを示している。純粋性は微笑みの有無ではなくタイミングで差が示された。このことから，カウンセラーが純粋であると評定されるには，いつカウンセラーが微笑むかが重要であることが示唆された。今回，カウンセラー評定の有能性においては第１，第２研究共に差は示されなかった。このことから，クライエントがカウンセラーを有能か否かと感じるのは，微笑みなどのノンバーバル行動によるものではなく，バーバル行動によるものが大きいのではないかと考えられる。

今後は，ノンバーバル行動とバーバルとを組み合わせた研究も必要になるだろう。

引用文献

福原眞知子・アイビィ，A. E.・アイビィ，M. B.（2004）．マイクロカウンセリングの理論と実践　風間書房.

アイビィ，A. E.（1985）．マイクロカウンセリング“学ぶ―使う―教える”技法の統合：その理論と実際　福原眞知子・椙山喜代子・國分久子・楡木満生（訳編）川島書店.

菅野純（1982）．カウンセリングにおけるノンバーバル行動　サイコロジー　10，36－41.

Mehrabian, A. (1969). Significance of posture and position in the communication of attitude and status relationships. ***Psychological Bulletin,*** **71**, 359-371.

Mehrabian, A. (1970). A semantic space for nonverbal behavior. ***Journal of Consulting and Clinical Psychology,*** **35**, 248-257.

Strong, S. R., Taylor, R.G., Bratton, J.&Loper, R.G. (1971). Nonverbal behavior and perceived counselor characteristics. ***Journal of Counseling Psychology,*** **18**, 554-561.

玉瀬耕治・石田恵利子（1995）．カウンセラーのうなずきの量に関する実験的研究　奈良教育大学教育研究所紀要　31，157－169.

玉瀬耕治・石田恵利子（1996）．カウンセラーのうなずきの量と挿入位置に関する研究　奈良教育大学教育研究所紀要　32，137－146.

玉瀬耕治（1998）．カウンセリング技法入門　教育出版社.

登張真稲（2003）．多次元的共感性尺度　堀　洋道（監）・櫻井茂男・松井　豊　心理測定尺度集Ⅳ－子供の発達を考える＜対人関係・適応＞－サイエンス社 87－94.

山本眞利子（2007）．マイクロカウンセリングにおける解釈技法の有効性に関する実験的研究　平成19年度広島大学大学院学位（博士）論文.

（2008. 4. 15受稿，2008. 7. 22受理）

ABSTRACT

Effects of smiles and their timing on counselor impressions

Sayaka YAMAGUCHI
Mariko YAMAMOTO

The first study ascertained the effects of smiles at the end of counseling sessions. Students watched video clips of counselors meeting with clients to assess counselor genuineness, sympathy and competence with and without smiles. The results showed that the score for counselor respect was higher with smiles. In the second study, the timing of smiles was altered. Counselors smiled either at the start, middle or end of counseling sessions, and counselor impressions were assessed. The results showed that the score for counselor genuineness was low when counselors smiled in the middle of counseling sessions. These results suggest that smiles represent respect paid to clients by counselors, but counselors who smile during sessions are not perceived as being genuine.

Key words: smile, timing, genuineness, respect,

会報

国際交流イベント報告

「Dr. & Professor José-Maria Prieto を囲む会」

国際交流イベントの経緯

平成20年８月３日（13：30－16：30）、滞日中のプリエト博士をお招きして歓迎の集いを催し、講話を伺ました。

お話のテーマは、「Awareness and sense of human, my psychological understanding of haiku and tanka tradition.」でした。

先生はスペインの心理学者として国際応用心理学会（IAAP）の常任理事を長くつとめられている方で、国際的にも活躍されています。

今回の来日は約20年間先生がたしなまれている俳句集を出版されたのを機に日本文化をより深く知りたいとのご意向で来日されました。

集いへの招聘は国際会議で仕事を共にしていたこともある福原が先生の日本文化へのご関心と造詣の深さを賞で、発案者としてアレンジしました。本学会は発足の当初から、マイクロカウンセリングトレーニングアソシエイツとの交流をはじめ、柱の一つとして国際交流に関心を持ってまいりましたので、関係者のご賛同を得たものです。

何分急な話だったので、まずホームページに報じ、ご関心のありそうな会員諸氏および外部関係者にご案内しました。その結果、おかげさまで約30名の方々にお集まりいただき、成功裡に終りました。

アイビイのいうマルティカルチャー（多重文化的）の観点からみても、このような交流の場は有意義な集いであったと思います。

そのようなわけで、その折の記録を稲垣先生（広報委員長）にお願いし、玉稿をいただきました。

また、稲垣先生を含め、会員有志で鎌倉、京都をご案内しました。その折にもプリエト先生のフィルターを通して、私どもは日本文化を再認する機会をいただけたように思います。

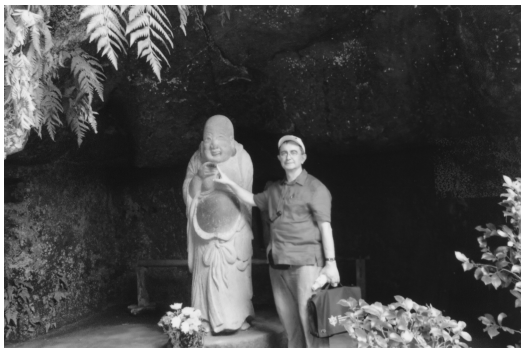
（福原眞知子記）

「囲む会」の開催

スペインの心理学者 Dr. José -Maria Prieto が来日され、本年８月３日、アルカディア市ヶ谷私学会館において「囲む会」が開催されました。日本の心理学関係の方々にも広くご参加いただき、午後のひと時を有意義に過ごすことができたものと思っております。

Dr. Prieto は日本文化における禅（中でも臨済禅）に関心を持たれ、日本の旅の中で是非鎌倉を……ということで会の前日に福原会長らと鎌倉（建長寺・浄智寺・円覚寺、それに鶴見の総持寺）を案内しました。昼には日本食で日本文化の中の食文化と寺院の雰囲気から禅の空気に触れられたのではないかと思われます。

囲む会では “My psychological understanding of haiku, tanka and koan traditions.”（俳句、短歌そして公案の伝統について私の心理学的理解）についてと題してレクチャーがありました。尚、このようなご関心は1990年に京都で国際応用心理学会議に参加されました折に、禅と公案、それに俳句・短歌に出会われたことがきっかけとなったようです。禅への関心と造詣の深さは、このあと京都・奈良をまわられ、そして福岡の禅センターにおいて１週間の禅体験をなさることからも推察されます。



講演要旨

日本文化への気持ちの表し方として、日本の皆さんにスピーチをする時「こんにちは」と挨拶するのを俳句を使ってご挨拶をと考えていたところ、その時に短歌についても興味を持ち始め、俳句と短歌が、日本文学において何世紀にもわたって果たしてきた役割における伝統についての私の勉強が始まったわけです。

もう一つ、俳句・短歌に加えて「公案」についても話させて頂きますが、これについての興味は、またちょっと出所が違っておりまして、西洋の心理学におけるアプローチに関連性があると思ったわけです。

俳句というものに興味を持つようになって、日本語で書かれたものだけでなく、英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語に翻訳されたものも大変興味をもってよむようになりました。

こうして15年間に作りました1000首以上の句集を2007年に出版し、それには日本大使館の公使の方の序文をいただいております。

日本における俳人といわれる方々は―心理学的用語を使えば―サプリメーションが見られ、精神性、審美性を重視する文化的バックグラウンドを持つ教育程度の高い人々が多いということも分かりました。日本の方々の作品には、一瞬一瞬の新鮮さに気付き生命性に満ち溢れた生き生きした態度が象徴的に表れています。

短歌というのは、心理学的プロファイルをしました時、俳句とはかなり異なっていることがわかりました。短歌は女性が書くことが多く、恋のやり取りを、男性は求愛の内容が多いことを学びました。短歌を作ることは一つの事柄を短い表現の中に凝縮されているということが日本文化の中に顕著に見られることを学びました。今年のクリスマスの前には私の作った短歌集が出版される予定です。これにも日本の公使が序文を書いて下さいます。

（この後、５首ほどの自作の短歌の解説がありました。下記はその１例です）

Haiku: examples
Vanishing bubbles
of champagne released by the cork
alive in the mouth

最後に公案ですが、公案というのは臨済宗において禅師に学んでいる人たちが悟りに近づいているか、進歩があったかということを見るために、いわば禅の問答において気付きについてそのテストとしてつかっていくものです。

悟りというのは心理学的にみますとセルフリアライゼーション（自己の認識）ということで、自己の有りようをどこまできちんと分かっているかということになります。公案を与えられた修行僧たちは、答えを求めて苦闘するわけですが、それを見る禅師の方は知的な理解ということではなくて修行僧たちのボディランゲージに注目し、実際に気付きが生まれているかに主眼がある、と判断していると言われます。

（この後、臨済宗と曹洞宗の公案の扱いについての違いを提示、公案の基本的スキームから５つのケースについての解説がありました。無門関についても触れられました。）

まとめとして、俳句と短歌と公案の３つに共通して見られることは、論理的思考ではないメタホリカルな比喩的な思考ということでありまして、これは、詩人であるとか美術を業とする方、映画にも表されているわけですが、それだけではない認知心理学的アプローチでは、論理心理学のほうにあまりにも多くの強調が注がれている現状です。そして、ヒューマニスティックな心理学におきましては、これと対比してメタホリック的比喩的な思考方法に大きな強調がおかれています。詩とか小説とかストーリーといったものが多く使われています。〔Prieto 先生講演の訳文より、但し（　）は筆者注〕

（稲垣　貢記）

NPO 心理教育実践センター広報 NO.7 より抜粋

会務報告

◯ 理事会報告

・平成20年度　第１回　理事会

日　時：平成20年６月10日 ―30日
（持ち回り理事会）

出席者：肥田野直（顧問）
福原眞知子（会長）、玉瀬耕治、冨安玲子、仁科弥生、山本孝子（理事）、鈴木祐弘（監事）、森山賢一（事務局長）、田村真知子（書記）
山口忠厚、小櫃重忠、松阪健治（相談役）

報告事項

1　平成19年度　第２回理事会(H20.3.23)の報告
2　編集委員会報告：第４巻第１号の編集の経過の報告
3　研修委員会報告：H20.3.23の研修会の報告
4　広報委員会：ホームページ更新の報告
5　久野洋子氏を嘱託として採用の報告
6　その他
日本学術会議よりの各種行事の案内やアンケートの処理については会長に報告し、適切に処理をする旨の報告。

承・追認を求める事項
（平成19年度第２回以降の案件の追認）

1　委員会の再構成
2　委員会の運営
3　Dr. Jose-Maria Prieto を囲む会の開催について

審議及び承認事項

1　委員会、理事会への参加費用について
2　学術集会委員会編成について
1）学術研究集会（平成21年３月予定）
2）学術研究集会（平成22年度中を予定）
3　出版企画委員会編成について
1）トレーニング記録集の発行
4　理事の増員について
5　本学会組織拡大にともなう NPO との関連を考える

・平成20年度　第２回　理事会

日　時：平成20年８月23(土)午前11時～12時半

場　所：アルカディア市ヶ谷

出席者：肥田野直、福原眞知子、玉瀬耕治、冨安玲子、仁科弥生、鈴木祐弘、森山賢一、山本孝子
相談役：山口忠厚　松阪健二、小櫃重秀、NPO 理事：稲垣貢　羽瀧義治、オブザーバー：久野洋子、田村真知子

1. 会長挨拶
2. 報告事項

（１）前回理事会報告
平成20年６月に開催された、持ち回り理事会の全案件が承認されたことが報告された。

（２）平成19年度決算報告及び会計監査報告について
仁科財務委員会委員長より、平成19年度会計収支計算書の説明があった。続いて鈴木監事により会計は適正であった旨報告された。

（３）各委員会報告
＜機関誌編集委員会＞
冨安委員長より、平成20年度日本マイクロカウンセリング学会機関誌編集委員会の報告の資料が配付され、それ以後の経過の報告があった。投稿資格は、会員またはそれに連名する著者に限定されるが、投稿費は無料であることが確認された。

＜研修委員会＞
鈴木研修委員長より当日午後に公開基礎トレーニング ② 及びアドバンストレーニング ② が開催されることが報告された。出席者には修了書ではなく、参加証を発行し、これが課程修了を意味するものではないというただし書きを添えることになったことが報告された。

＜広報委員会＞
稲垣委員長より、添付資料に基づく活動

内容についての説明があった。福原会長より、ホームページを改定した旨の報告があった。

（4）プリエト博士を囲む集い

福原会長より、平成20年８月３日にアルカディア市ヶ谷で開催されたスペインの「プリエト先生を囲む会」が学会主催で成功裡に終わった旨の報告がなされた。プリエト先生の講演（通訳付き）は心理学の観点より俳句、短歌、公案を理解する」というものであった。参加者は会員を含む心理学関係者約30名。

（5）その他

3. 審議事項

（1）平成20年度総会及び第１回研究会

午後に予定されている平成20年度通常総会と研究会の計画について話された。研究会と研修会の別を明確にしたほうがよいとの意見がのべられた。

（2）平成20年度第２回研究会以降もトレーニングプログラムは継続する。第２回ではまず基礎トレーニングを計画するが、アドバンストは逐次計画することが提案され、了承された。

（3）平成20年度予算（案）について

仁科財務委員長より資料にもとづき、平成20年度の予算案が説明された。今後会員を増やすなどして、収入を増やす必要があり、よい計画があれば申し出てほしいとの要請がなされた。

（4）学術集会の企画

検討の結果、平成21年３月21日、22日の日程で開催することが了承された。それにともない企画・運営委員会（準備委員会）を速やかに立ち上げることになった。第１回準備委員会を９月18日に予定した。

（5）日本心理学諸学会連合に加盟する件

資料を参考に説明されたが、時間の都合上継続討議されることになった。

（6）役員推薦

岡村一成（富士大学学長・教授）が理事に推挙され、了承された。

（7）公益法人化の検討

日本学術会議説明会（７月29日）にて配布された資料をもとに新制度のもとにおける公益法人について松阪相談役から説明がなされた。本学会の公益法人化については今後も議論が重ねられることになった。

（8）出版企画委員会

1）トレーニング記録集の編さん

2）プリエト博士の集いの記録集の編さん

いずれも時間の都合上審議は持ち越された。

・平成20年度　第３回　理事会

日　時：平成20年12月25日（木）15：00～18：20

場　所：新宿パークタワー 30階会議室（菊の間）

出席者　肥田野直（顧問）　福原眞知子（会長）岡村一成、玉瀬耕治、冨安玲子、仁科弥生、山本孝子（理事）鈴木祐弘（監事）森山賢一（事務局長）

山口忠厚、松阪健二、小櫃重秀（相談役）稲垣貢（NPO 理事）

久野洋子、田村真知子（事務局）

1. 学会長挨拶

2. 報告事項

（1）前回理事会報告（H. 20.　8. 23）

理事長より前回理事会の報告とその後のe-メール・電話でのやりとりによる持ち廻り理事会について報告があった。

（2）各委員会報告

研修委員会

鈴木委員長より、打ち合わせ会が３回開催されたことが報告された。

機関誌編集委員会

冨安委員長より３月に機関誌が発行できるように進んでいることが報告された。

広報委員会

稲垣広報委員長より、日本マイクロカウンセリング学会ニュースレター No. 20、および NPO 心理教育実践センターニュースレ

ター No. 7ができあがり、それぞれ年内に会員に発送されることが報告された。

財務委員会

仁科財務委員長より平成20年度に３回財務委員会が開催され、その議事録が配付された。

学術研究集会準備委員会

福原準備委員会会長より９月18日に開催された第１回企画・運営委員会、およびその後のもちまわり委員会で決定された事項（日程、テーマ、運営業務概要、研修会）について報告があり、意見を求めた。玉瀬シンポジウム担当委員長よりシンポジストの選出、コンタクト等の経過が報告された。

3. 審議事項

（1）学術研究集会

全体テーマ、シンポジウムテーマ、研修会の目的が討議され、まとめられた最終案が承認された。参加対象者として、後援・協賛学会会員のステータス等について討議された。特に後援学会会員の参加費については一般の参加者と区別することが決議された。

（2）学術研究集会の後援

日本応用心理学会、産業・組織心理学会が後援団体に日本心理学会が協賛団体に決定、日本健康心理学会も後援予定であることが確認された。山口相談役より日本学術会議の後援を依頼する書類を入手できたが、今回は時間が十分ないので申請をしないことが確認された。NPO 心理教育実践センターは共催ではなく、後援団体とすることが決議された。

参加費に関しては２日を通して、当学会会員は5, 000円、後援及び協賛学会員は4, 000円、その他一般は5, 000円で、懇親会費は別途2, 000円と決議された。

（3）研究発表、共同発表の会員資格について

本学会会員および会員との共同発表は認める。

（4）学術集会の PR について

ポスターは１月15日までにしかるべき個人および各団体に発送できるように作成することがきめられた。

福原準備委員会委員長より各理事に各自の関係団体にポスターを配布していただきたい旨の依頼があった。その他メディアに広報する計画が話された。

（5）会員募集の方法

ホームページで会員の募集方法を検討するにあったて、会員の資格を定義する必要がある。それにともない入会申し込み書の書式を考え直す必要がある。現行の住所、e－ メールアドレス、電話番号、所属に加えて、学歴、職歴、活動歴などを書き込む欄をつけることが提案され確認された。また入会には２年以上本学会に所属している会員からの推薦が必要とすること、応募者側で適当な会員がいない場合は事務局でこれを援助することが決まった。早急に申込用紙を作成し直すことになった。

（6）継続審議

１）日本心理学諸学会連合に加盟する件

岡村理事が資料を配布して、日本心理学諸学会連合に加盟する案を提案された。委員会に代表を送る、会費を払うなど義務もあるが、いろいろな便宜が受けられることが説明された。今後６月申請締め切りに向け検討することが決議された。

２）公益法人化への検討

松阪相談役より、公益法人化のメリットとしては団体として、会自身が財産となる、税の優遇処置を受けることができる等があげられた。一方そのためには団体として、組織をしっかり確立する必要があり、登記するための手続きが負担になるだろう等の説明があった。

３）出版・企画

８月３日に開催された「プリエト先生を囲む会」の内容を冊子にして出版する案が継続審議され、冨安理事と稲垣広報委員長がこの任にあたることが決議された。

（7）その他

1）研修会の基本案が鈴木研修委員長より提案され、年２回での基礎トレーニングは今後も継続すること、テキストに忠実に研修会を毎回行うことが確認された。アドバンストは会員間で話し合って決めることになった。

2）山本理事より研修会について臨床心理士継続研修のポイントを提供できる学会に参加することの可能性の検討が提案された。これについては山本氏を中心に前向きに検討することが確認された。

3）アイビイ博士の招聘について

本学会の学会化直後より、アイビイ博士の招聘が考えられていたが、これについて平成21年10月の前半か後半が好都合とアイビイ博士より連絡があった旨、福原会長より報告された。これらをふまえ招聘全般について今後継続検討をする。

○ 平成20年度通常総会

日　時：平成20年８月23日（土）12：30～13：00

場　所：アルカディア市ヶ谷（妙高の間）

出席者：定足数（委任状を含む）を満たして成立した。山本孝子会員が議長に選出された。

報告事項

① 平成19年度決算報告が仁科理事によりなされ、監査報告が鈴木監事によりなされた。

② 冨安玲子委員長により機関誌編集委員会活動、鈴木祐弘委員長により研修委員会活動、稲垣貢委員長により広報委員会活動がそれぞれ報告された。

審議事項

① 平成20年度予算案が提出され、承認された。

② 平成20年度第１回研究会（平成20年８月23日）の計画が提示され、承認された。

③ 平成21年３月に学術研究集会を実施することが承認された。

○ 各委員会報告

・研修委員会報告

第１回研修打ち合わせ会

日　時　平成20年５月22日（木）

場　所　新宿パークタワー 30階　事務局

出席者　福原眞知子（会長）、鈴木祐弘（委員長）、久野洋子、田村真知子（事務局）

内　容　８月23日研修会の時間割、案内の配布先の選定、リスト作成などが討議された。

※ 打ち合わせ会　委員長が事務局と研修会の段取り全般について打ち合わせを行った。

第２回研修打ち合わせ会

日　時　平成20年５月27日（火）

場　所　新宿パークタワー 30階　事務局

出席者　福原眞知子（会長）、鈴木祐弘（委員長）、久野洋子、田村真知子（事務局）

内　容　８月23日研修会の部屋割り、プログラム、役割分担についてなどが検討された。

第３回研修打ち合わせ会

日　時　平成20年８月５日（火）

場　所　新宿パークタワー 30階　事務局

出席者　福原眞知子（会長）、鈴木祐弘（委員長）、田村真知子（事務局）

内　容　研修会参加者への参加証作成について検討がなされた。

平成20年度第１回研修会

日　時　平成20年８月23日（土）

場　所　アルカディア市ヶ谷私学会館

内　容　・基礎トレーニング②

積極技法を中心に鈴木祐弘講師により運ばれた。

対象は会員及び一般（公開）

・アドバンストレーニング

玉瀬耕治講師により運ばれた。

対象は会員

平成20年度第２回研修会

日　時　平成21年３月21日（土）

場　所　アルカディア市ヶ谷私学会館

内　容　・基礎トレーニング①

「かかわり技法を中心として」

講師　鈴木祐弘、大西靖子
対象　会員及び一般（公開）

・機関誌編集委員会報告

第１回委員会

日　時：平成20年６月19日(木)13：30～15：30
場　所：新宿パークタワー 30階　会議室
出席者：福原眞知子（会長）、肥田野直、森山賢一、冨安玲子（委員長）
田村真知子（事務局）、久野洋子（事務局）

議　題

1. 投稿論文審査経過報告について
現在１篇の論文が審査中であるあることが報告された。
2. 投稿資格について
編集規定２により、日本マイクロカウンセリング学会員であることが必要であり、かつ当該年度までの学会費納入の確認が必要であることが確認了承された。
3. 論文の内容の範囲について
マイクロカウンセリングに関わる内容であることが確認された。
4. 投稿手続き及び投稿論文審査手続きについて
現在明文化されている編集規定及び執筆規定のほかに、具体的手続きの明示が必要であり、本学会の実情に合った規定を今後策定していくことになった。
5. 次号（第４巻第１号）の掲載内容について
巻頭言またはそれに代わる形で福原学会長による日本学術会議協力学術研究団体承認の報告及び経緯、原著論文１篇、及び学会情報の掲載について承認された。

第２回委員会

日　時：平成20年９月18日(木)15：30～16：00
場所：新宿パークタワー 30階　会議室
出席者：福原眞知子（会長）、冨安玲子（委員長）、肥田野直、玉瀬耕治
田村真知子、久野洋子（事務局）

議　題

1. 編集手続きについて
学会誌の装丁及び印刷所を決定し、今後の編集に関わる具体的な日程、役割等を確認した。
2. 機関誌発行予定について
10月には５巻１号を刊行予定とし、３月開催の学術研究集会記録の登載を検討する。
3. 原稿募集方法について
HP とニュースレターに常時原稿募集記事を登載していくことが確認された。

・広報委員会報告

平成20年度通常総会において報告（８月23日）

・５月31日　ニュースレター 19号発行について
・国際交流イベント「Dr. Pieto を囲む会」について

第３回理事会において報告（12月25日）

・10月31日　ニュースレター 20号の発行について

平成20年度学術研究集会プログラムおよびポスターの作成・発送（平成21年２月４日）

・財務委員会報告

第１回委員会

日　時：平成20年７月８日(火)午前11時～12時
場　所：新宿パークタワー 30階　事務局
出席者：福原眞知子、仁科弥生、田村真知子（事務局）
議　事：平成19年度収入支出にかかわる資料の整理

第２回委員会

日　時：平成20年７月29日(火)午前10時～12時
場　所：新宿パークタワー 30階　事務局
出席者：福原眞知子、仁科弥生、田村真知子（事務局）
議　事：（１）平成19年度会計収支計算書並びに特別会計収支計算書の作成準備
（２）平成20年度予算案の検討

第３回委員会

日　時：平成20年８月５日(火)午後１時～４時
場　所：新宿パークタワー 30階　事務局
出席者：福原眞知子、仁科弥生、田村真知子(事務局)
議　事：(１)平成19年度会計収支計算書並びに特別会計収支計算書の作成
(２)平成20年度予算案の作成

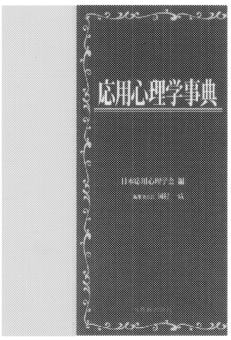
日本応用心理学会　創立60周年記念出版

応用心理学事典

日本応用心理学会 編 編集委員長：岡村一成
A5判・736頁　上製・函入　定価21,000円（本体20,000円）　ISBN 978-4-621-07807-5

心理学に対する偏った知識を無くし、
社会の様々な問題解決に役立つ15分野からなる中項目事典

○ 現代の心理学が多くの分野に分化し、応用され発展してきた内容をわかりやすく解説。
○ 私たちの生活に密着した身近な学問として正しく理解するための事典。
○ 細分化された現代心理学の諸分野の研究水準が浮き彫りにされ、今後の研究活動に役立つ情報を提供。
○ 日本応用心理学会の役員および会員約240名による執筆。300項目を見開き2頁で解説。
○ 心理学に関心を持つ人びとが偏った知識を無くし、心理学により興味を抱かれ、社会においてさまざまな問題解決に役立つ一冊。
○ 付録には、文献ガイドや日本心理学諸学会連合加盟学会連絡先など役立つ情報を掲載。



丸善〔出版事業部〕〒103-8244 東京都中央区日本橋 3-9-2 第二丸善ビル 営業部TEL(03)3272-0521 FAX(03)3272-0693
http://pub.maruzen.co.jp/

マイクロカウンセリングの歩みと展望

福原眞知子 監修・編集
日本マイクロカウンセリング学会 編

B5判美装・370頁／定価（本体2,800円+税）

カウンセリング学習のための“メタモデル”の理論であるマイクロカウンセリングがわが国に導入されて20余年，その理論と技法は，教育・医療・看護・福祉・産業の分野はもとより，さまざまな人間援助の現場で広く活用されている。本書は，マイクロカウンセリング創設者A・E・アイビイ博士と共同研究者である福原眞知子博士が設立した研究会が行ってきた研究会・研修会での成果を基に，日本マイクロカウンセリング学会の活動の歩みとその実際を紹介する。カウンセラーのみならず人間関係の援助にかかわる人への基本書。

川島書店
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-15-17
Tel (03) 3365-0141（代表）／ Fax (03) 3365-1101
URL http://kawashima-pb.kazekusa.co.jp

◎刊行図書のご案内◎

マイクロカウンセリング技法

—事例場面から学ぶ—

福原眞知子 監修

A5 判 224 頁 3,675 円（税込） DVD 付 2009 年 1 月重版

マイクロカウンセリング技法をわかりやすく解説。事例場面を通して技法を習得。
本文に掲載された、「基本的傾聴技法の連鎖」「肯定的資質の探求」「基本的傾聴技法と積極技法の連携」の事例場面 4 つをDVDに収録。悪い例と良い例を見ることによりマイクロ技法がいかに有効に使われているかを学び、技法を身につけよう。

マイクロカウンセリングの理論と実践

福原眞知子 アレン・E・アイビイ メアリ・B・アイビイ 著

A5 判 570 頁 4,830 円（税込）

Ivey, A. 博士らによるマイクロカウンセリングは現場に役立つカウンセリングの基本モデルとして米国内外で注目されてきた。日本でも導入以来20年が経過し、ひとつの節目をむかえた。そのコンセプトを確認しつつ、文化的に適合する技法の展開が望まれる。それらをふまえ、アイビイ博士の協力を得て本著を編集／執筆した。とくに技法の説明では博士らの近著、Intentional Interviewing and Counseling に負うところが大きい。また、臨床の場で不可欠のリサーチエビデンスについては、マイクロカウンセリング研究をまとめたDaniels, T. 博士から翻訳許可をいただき、これを紹介した。

カウンセリングへの道—高等教育における日米二国間のプロジェクトの報告—

ウェズリー・P・ロイド 著 福原眞知子 訳 A5 判 262 頁 3,990 円（税込）

1951 年に教育使節団として派遣されたアメリカ講師団は SPS を日本の教育に導入し、これは現在の学生相談の原点となった。本書はその折の報告書の訳本である。

来談行動の規定因—カウンセリング心理学的研究—

福原眞知子 著 A5 判 354 頁 12,600 円（税込）

戦後の教育改革を契機に大学の教育理念は全人的発達に向けられ学生相談が導入されたが、来談行動を規定する要因についてカウンセリング心理学の立場から取組む。

風間書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
電話 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757 振替 00110-5-1853
http://www.kazamashobo.co.jp E-mail pub@kazamashobo.co.jp

編集委員

編集顧問　肥田野　直
委員長　　冨安　玲子
委　員　　玉瀬　耕治　　森山　賢一

マイクロカウンセリング研究　第４巻 第１号

The Japanese Journal of Microcounseling Vol.4, No.1

©2009年3月31日発行

編集責任　日本マイクロカウンセリング学会
会長　福原眞知子
発　　行　日本マイクロカウンセリング学会
会長　福原眞知子
本　　部　〒167-0034　東京都杉並区桃井1-18-7
事 務 局　〒163-1030　東京都新宿区西新宿3-7-1
新宿パークタワー 30階
TEL 03-5326-3415
FAX 03-5326-3605
印刷・製本　株式会社厚徳社

無断複製・転載を禁じます。

ISSN1881-6029

The Japanese Journal of Microcounseling

Vol.4, No. 1/March 2009
Edited and published by
The Japanese Association of Microcounseling
30th F. Shinjuku Park Tower, 3-7-1, Nishi Shinjuku
Shinjuku-Ku, Tokyo 163-1030, Japan

President: Machiko Fukuhara
Editorial Committee: Tadashi Hidano
Reiko Tomiyasu
Koji Tamase
Kenichi Moriyama

Contents

Special Contribution:
Machiko Fukuhara
In honor of the establishment of the Japanese Association of Microcounseling…… 1

Articles:
Sayaka Yamaguchi & Mariko Yamamoto
Effects of smiles and their timing on counselor impressions…… 14

Reports:
A review of international exchange activity…… 23

From the Secretariat…… 25

The Japanese Association of Microcounseling
日本マイクロカウンセリング学会